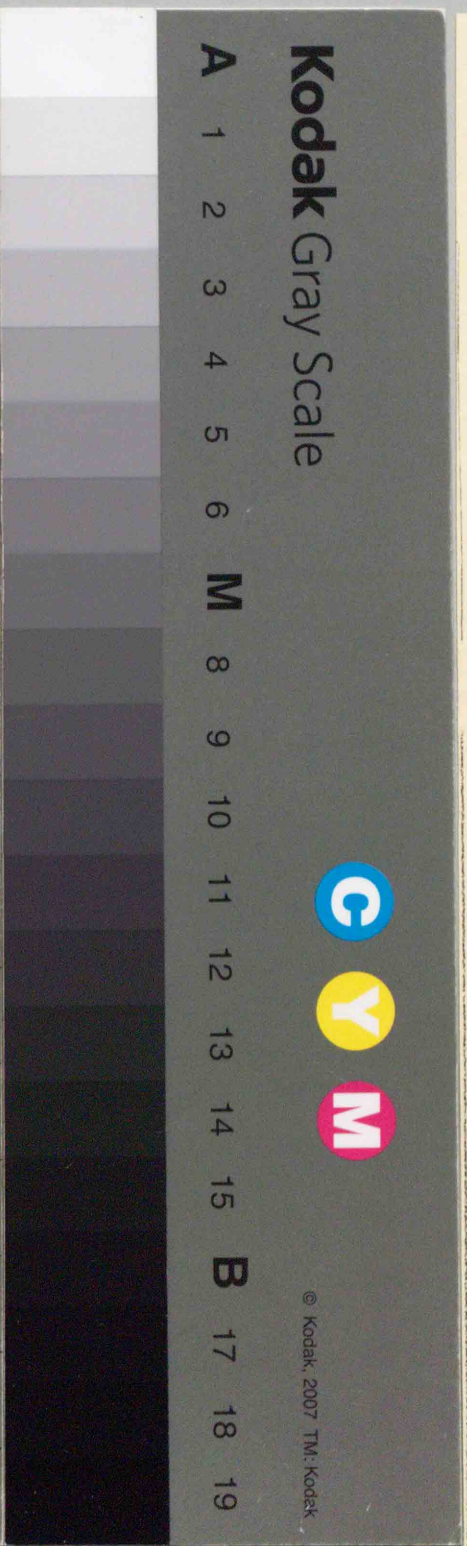
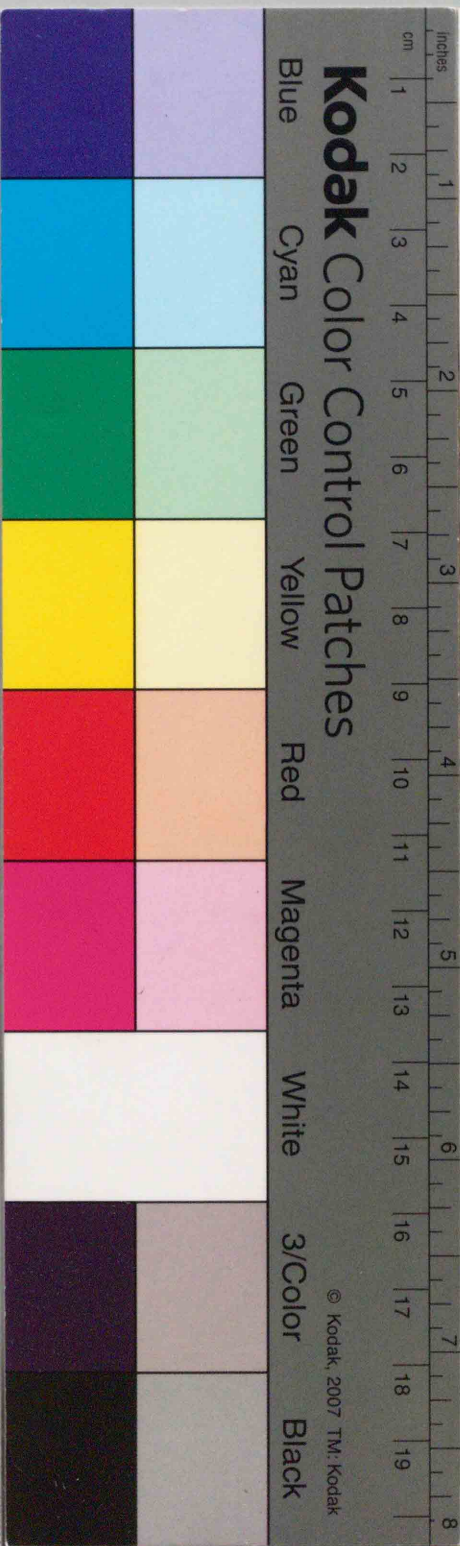
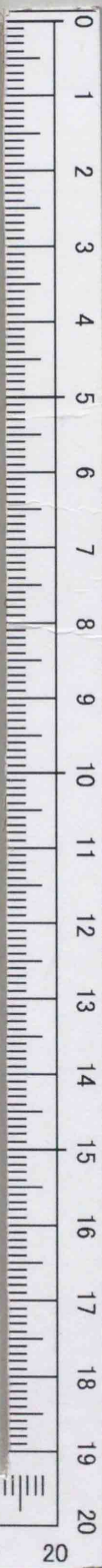
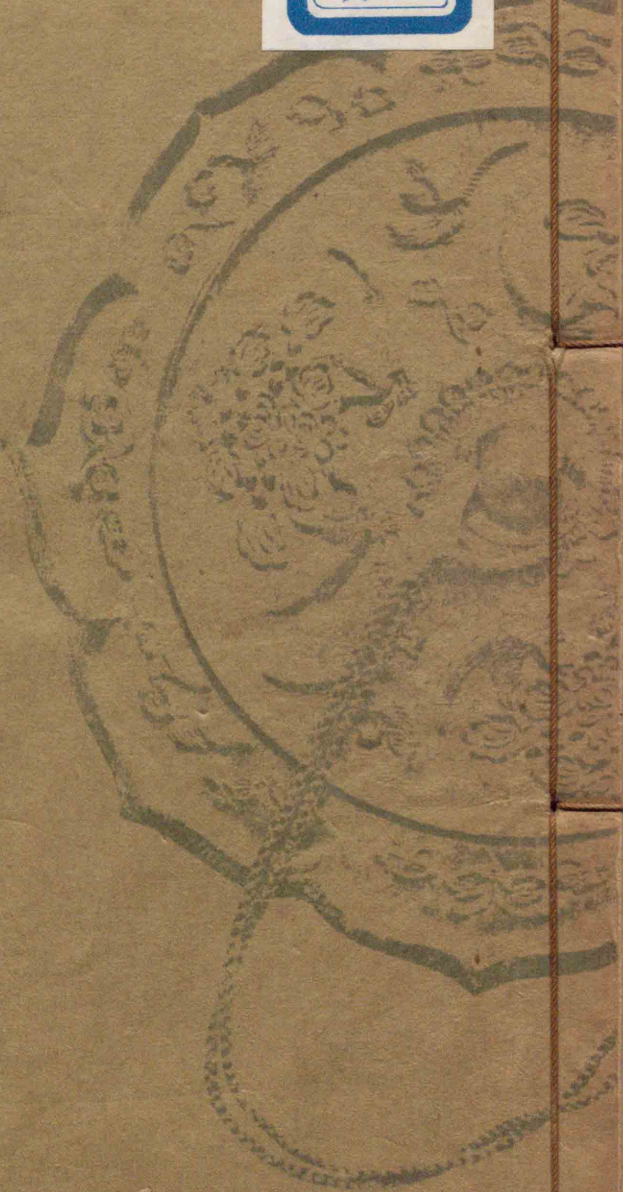


訂三  
新日本讀本  
吉澤義則編  
四

3759  
Y019  
資料室



41433

教科書文庫

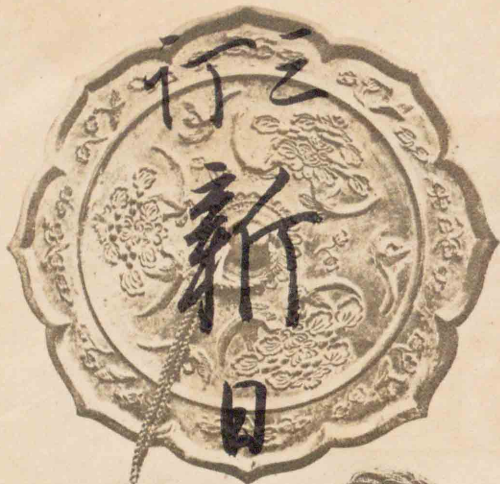
4
810
<del>200030</del> 41-1931
<del>1707</del>

2000301707



375.9  
Y019

資料室



行之  
新  
日本  
讀本

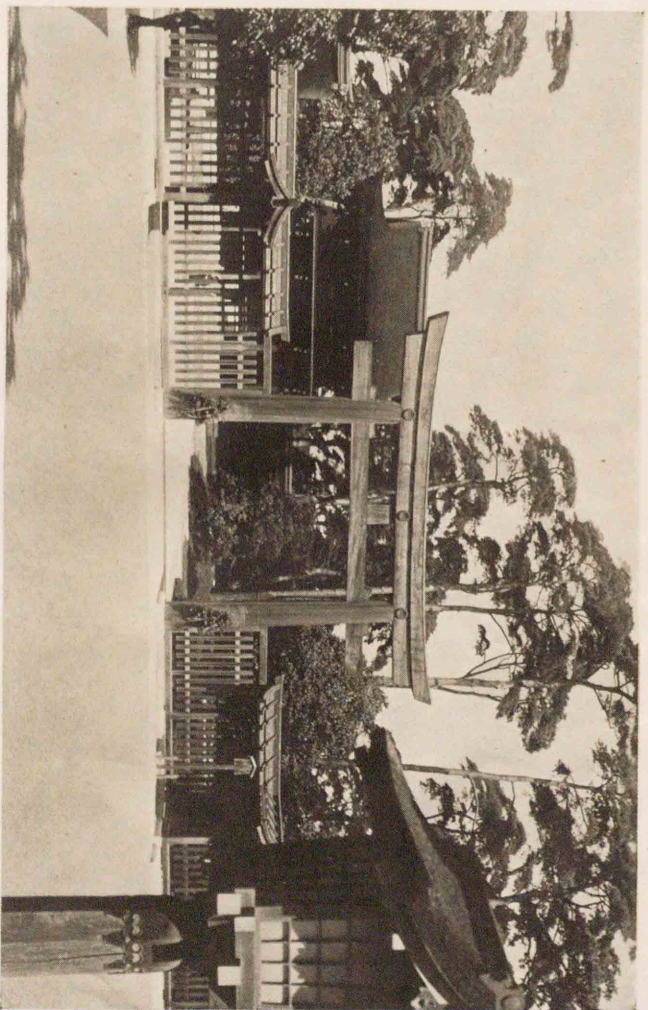
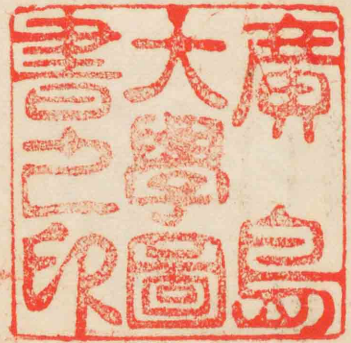
昭和六年十一月二十八日  
中學校國語漢文科用  
昭和八年七月六日  
實業學校國語科用

文部省檢定濟

修文館發行







(第壹課參照)

明 治 神 宮



卷四 目次

一	明治神宮	溝口白羊	一
二	明治節唱歌	(文部省選定)	一七
三	爽やかな心	河野省三	一九
四	哲人聖徳太子	高島米峰	三〇
五	相模灘の落日	徳富蘆花	三八
六	武蔵野の徑	國木田獨步	四二



七	萩の家
八	我が幼時
九	文章の道
一〇	句讀點
一一	靜觀
一二	緋緘の鎧
一三	言葉の變遷
一四	國語の力

落合直文 四九

(折焚く柴の記) 五三

島崎藤村 六二

薄田泣菫 六九

若山牧水 七三

(諸家) 八五

佐々醒雪 八九

上田萬年 九七

一五	藤樹先生
一六	雪のわかれ
一七	誠の説
一八	我が袖の記
一九	北國春信
二〇	覺めたる芽
二一	競技の精神
二二	反省

(東遊記) 一〇一

村井弦齋 一〇七

(梅園叢書) 一二七

高山樗牛 一三三

相馬御風 一三六

河井醉茗 一三八

矢島鐘二 一四〇

(大和俗訓) 一四六



- 二三 仁に返れ
- 二四 松下村塾を訪ふ
- 二五 皇室と國民

徳富蘇峰 一四九

下村海南 一五六

芳賀矢一 一六四

終



口繪参照

卷末地圖参照

溝口白羊

名は駒造、大阪府の人、明治十四年生、文章家。

代々木

東京市の西郊代々木(よきはた)町の大字

訂三 新日本讀本 卷四

一 明治神宮

溝口 白羊

快美な色彩の反射と、柔らかない感觸とを有つ秋の陽光に包まれてゐる代々木の森！ 私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度そこを通つた事だらう。森の中から、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。或時は、六



「代々木の森のひびき」

衝動

終る。

終へる。

「整つていくうれしさ」

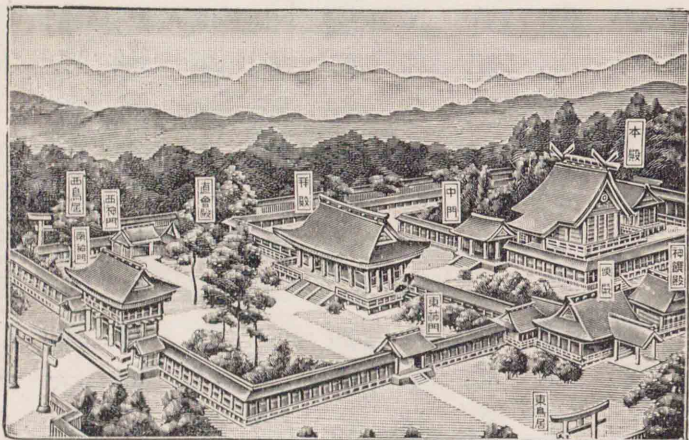
「竣工」

七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多数の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲で森の中へ引き入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ！ さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、生みの親の墓に對するやうな強い懐かしさで充溢された。そして、毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出来て、殿舎の形の次第に整つていくのが堪らないほど嬉しく思はれた。

その明治神宮がたうとう竣工した。嘗て赤い土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも列んで、烈しい

幽邃



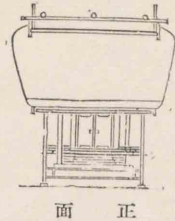
明治神宮全景

日に光つてゐるのが見えた處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、疎な松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間、にやら、すっかり見違へるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃の趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、



「神々しい感じ」  
流造

神社建築の一種、側面を破風造とし、棟より前の軒先までを後の軒先までよりも長くして、向拜參詣人が拜禮する所をも併せ覆ふやうに造つたもの、流破風造



側面



正面

幽雅  
延人員  
尺  
超越

謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域！ 眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅の領土。私は始めて完成した明治神宮の神苑に立つた時、その改まつた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力がこの新しい「建設」の事業を完成させたのだらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隠れた部面に働いた強い力

明治天皇

第百二十二代、御名は睦仁、明治四十五年崩御、御年六十一。

昭憲皇太后

御名は美子、大正三年崩御、御年六十五。

懿德

「隠れた部面に働いた強い力」

獻(獻)

こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固さに築き上げたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖徳と、海よりも深い昭憲皇太后の御懿徳と、そして、この二柱の大神のお恵に對へ奉る國民の至純な感謝の心情と、この三つのものが陰に陽に工程を抄らせて、遂にこの記念すべき大工事を完成するに至らせた原動力であることは、何人も疑ふことの出来ない明瞭な事實である。

嗚呼！ 純粹な至誠の動機から出た青年團員の造營奉仕、百里、二百里の遠方から眞心を籠めて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實にこの神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本



の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かうして殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。なんといふ美しい尊い事實だらう。今までの神社に會て見たことのない明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直接に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこのことを直感した。そして、一歩々々、美しい小砂利の上を神殿に近く踏み入るに隨つて、いよゝゝ肅然たる心持になつて、深く襟を搔き合はせた。

「至誠の動機から出た造營奉仕」

清冽

萬成

岡山市内の西北方、萬成山

筑波山

茨城縣、海拔八七六米

「特殊の庭園趣味」

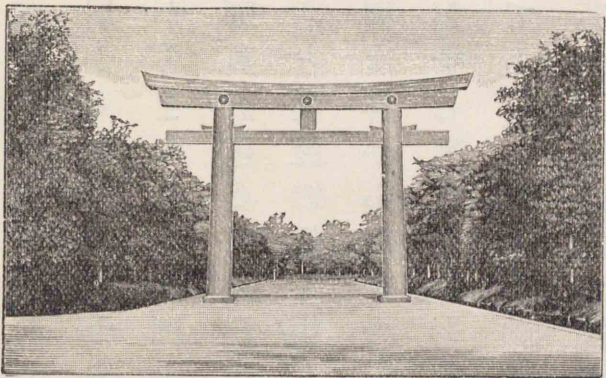
參道の兩側には、盡きること知らない密林が何處までも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく、清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成産（まなび）の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致のいゝ細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が今しも紅葉の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。こゝは神苑中で、唯一の人工味を加へた處で、神苑の殆ど總てが繊細な技巧を排した自然的大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。



斷  
え。

「日本一の大鳥居」

原宿  
東京府豊多摩郡千駄  
が谷町大字原宿  
千駄が谷  
同大字千駄が谷  
幅員



大鳥居

神橋を渡ると、兩側は一帯の杉並木になつてゐて、その左側の並木の斷えた處に、千七百四十といふ驚くべき樹齡を重ねたといはれる、直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、その高さは三丈九尺に達するとのことだ。この鳥居のある處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄が谷方面から來てゐる幅員六間の北參

道との接合點で、こゝから左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、はつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

土佐繪  
土佐權守春日經隆の  
創めた繪畫の一派。  
「土佐繪のやうな神  
殿の檜皮葺」

木曾  
長野縣西筑摩郡

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を併せて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿に登つて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、いかにも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して



衆庶

奥は、即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖な場所である。

何事のおはしますかは知らねども

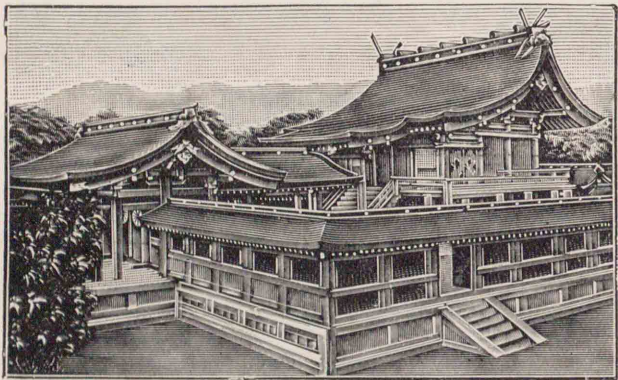
かたじけなさに涙こぼるゝ

私は黙禱を終へて、始めて向うを見上げた。

まあ、なんといいふ明るい快い感じを有つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周囲から来る鈍い光波の中に、静寂な、しかし陰鬱な感じをたゞよはせてゐる中に、この神宮ばかりは隠すところのない心持で、十分な光線に總てを解放し、總てを暴露して見せてゐる。然も、それでゐて、決して浅露な心持はせず、却つて一層深く大

何事の  
西行法師が伊勢神宮  
に参拜した時に詠ん  
だ歌。  
かたじけなし  
「神聖な場所」

浅露



明治神宮本殿

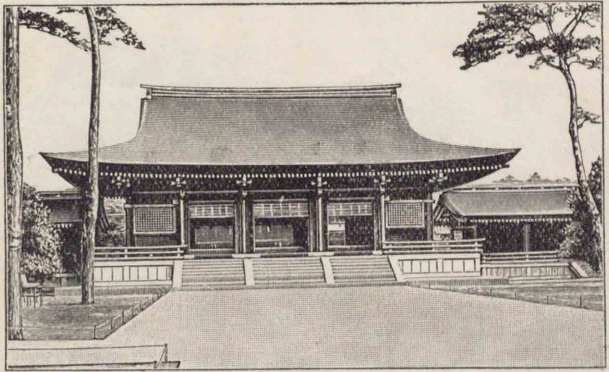
きくされた静寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して来て、自然と頭を下げさせるやうな強い威力が迫り寄るのを覚える。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出来る、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して、新文明を吸収しようとお努め遊ばされた明治天皇の活動的進取的の潤達な御氣象に對して、そ

「潤達な御氣象と明るいお宮」



便殿

「たとしへもない莊嚴美」



拜殿

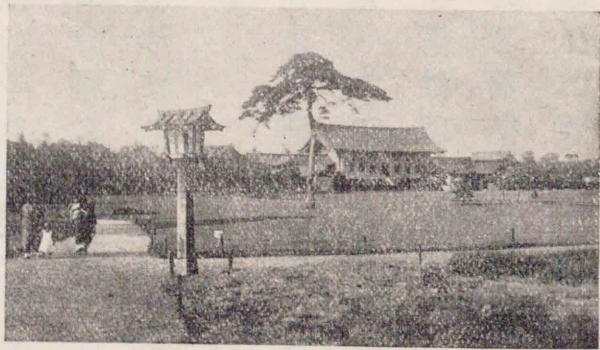
の明るいお宮の感じが、いかにもびつたりと呼吸を合はせてある様に思はれる。拜殿を中心にして、左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして、その奥に便殿の遠く望まれる心持、それら總てがまたたとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亘る森林帯がある。つて、その向う、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺める

「莊嚴から優雅への急轉」

やうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、また莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。こゝらに來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帯び、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交じつてゐるのが少からず目に著く。

寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は形式を中古時代に取り、その材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋



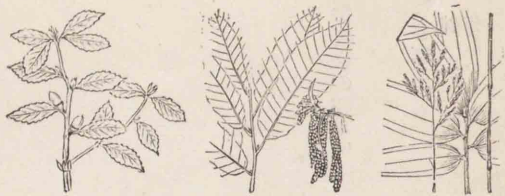
寶物殿



八幡製鐵所  
福岡縣八幡市にある。

コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は、約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を繞つて、若々しい楓の樹が美しく植ゑ列ねてある。

私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の枿形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり、左右兩側にある古雅な木柵を繞らした一構は、即ち明治天皇、昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、いづれも極めて御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景



「御苑の野趣」

色そのまゝで、殊更技巧を弄しなるところになんともいへない優雅な趣致がある。この御苑は、祭神二柱の御在世中、殊に御愛賞遊ばされた處で、高くそびえてゐる松を背景にして、芝生の上に點在してしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連りつゝいてゐる櫟や檜の雜木林にも、東京近郊では到底見ることの出來ない野趣がある。

私は此等を一わたり拜見し廻つて、涙ぐましいほどの強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので、御門を出た。振り返つて見ると、神殿のあたりは、もうすつかり深い霧に包まれて、黒々と晝でも暗いほど生ひ茂つてゐる



樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白い色が暮れ残つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、何時までも、長く鑄つけられたやうに残つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な幽邃な優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか。(明治神宮紀)

「参拜後の印象」  
形容詞（口語）  
鈍い  
芳しい

## 二 明治節唱歌

文部省選定

亞細亞の東日出づる處、  
聖の君の現れまして、  
古き天地とざせる霧を、  
大御光に限なくはらひ、  
教あまねく道明らげく、  
治め給へる御代尊。

惠の波は八洲に餘り、  
御稜威の風は海原越えて、



神の依させる御業を弘め、  
民の榮行く力を展ばし、  
外つ國々の史にも著く、  
留めたまへる御名畏。

秋の空すみ菊の香高き、  
今日のよき日を皆ことほぎて、  
定めましける御憲を崇め、  
諭しましける詔勅を守り、  
代々木の森の代々長へに、  
仰ぎまつらん大帝。

河野省三

埼玉縣の人、明治十  
五年生、國學者、文  
學博士、國學院大學  
教授。

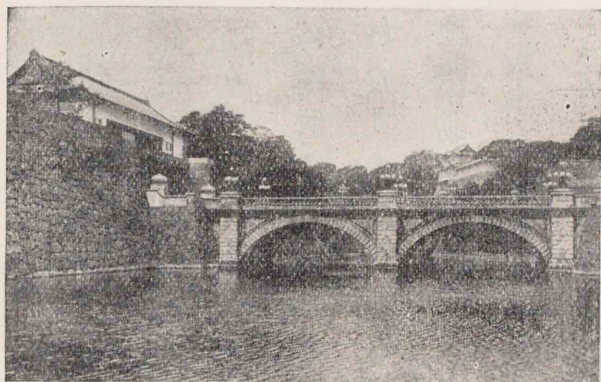
三 爽やかな心

河野省三

私どもは、晴れた日に、東海の天に聳える富士山の姿を  
仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるので  
あります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然  
に晴れ〜したみやびやかな氣分になるのであります。  
日の丸の旗がひら〜と翻つてゐるのを見ますと、そこ  
に活動的な活き〜とした氣分が起つてくるのであり  
ます。或はまた明治神宮に參拜いたしまして、神宮橋を  
渡り、白木のお鳥居をく〜り、清淨な參道を吸ひ込まれる  
やうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿の前に參りま

清淨





城 宮

すと、自ら清々しい尊い気分につまれます。更にまた松の緑の滴るお濠の前に立ちまして、我が皇室の御隆盛を思ひますと、なんともいへぬ神聖な気分が現れてくるのであります。

これ等の神々しい、清々しい、晴晴しい心持こそ、實に我々日本人が、遠い昔から養つて来た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育てあげて来た純眞なる心は、全く我が

國民性の本質でありまして、所謂大和魂の眞髓であります。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち満ちた心が、即ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとく爽やかに

持たまほしきは心なりけり

とお詠みあそばされてありますが、その爽やかな心は、取りも直さずかやうな純眞な氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て毎日々々の生活を營むに當



りましても、最も必要な気分であり、且価値のある態度は、誠にこの爽やかな心にあります。

この爽やかな心は、晴れ々しい広い心持であります。徒に物に屈托しない、ゆつたりとした心であり、またみだりに他を排斥しない、穏やかな心であります。この心からして、かたよりのない、爽やかな気分を味はふことができるのであります。爽やかな心は、明快な裏表のない心持であります。濫味のある、生々とした生活は、最も望ましい世の中であり、ます。偽らない正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命も亦こゝにあると信じますが、天真爛漫は即ち爽やかな心の本體であります。

屈托

天真爛漫

建設的

根 底

神 道

爽やかな心は、かく清らかで、濫味のある、生き〜とした心持であり、まして、建設的に、有意義に、總ての物を生かしてゆくと、ころの積極的精神であります。所謂朝日の豊榮昇る気分が、即ちこの爽やかなる心の働であります。我々日本人は、かういふ爽やかな心を根柢としまして、この尊い國體を築き上げ、この立派なる國民道徳を形造つて來たのであります。我が國民精神の現れである神道は、即ちこの爽やかな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については、色々の説がありますが、畢竟はこの爽やかな心、純眞な気分、に生きる所の日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。



風靡

本居宣長  
伊勢松坂の人、國學者、享和元年（西曆一八一〇）歿、年七十二。

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に、伊勢國松坂にあつて、天下の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長であります。その本居宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人間はば

朝日に匂ふ山ざくら花

とありますが、この大和心も正しくこの爽やかな心の姿をたゞへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞心の尊さを説いた人であ

ります。さうして、ひたすらに我が國家を愛する道を力強く主張した人であります。

朝日に匂ふ山ざくら花は、如何にも清らかであり、さうして單純にさつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふところのない、清いみやびな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特色が表れてゐるのであります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を、明るく淨く正しく直き心とも申しまして、道德の根柢となる心はこゝにあると信じて居つたのであります。

かゝる爽やかな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家



經典  
簡素

五十鈴川  
皇大神宮の傍を過ぎ、  
北に流れて西二見村  
に注ぐ。  
西行法師  
歌僧 俗名佐藤義清  
建久元年(一一五〇)寂年  
七十二

を愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐることは明らかであります。神社は我が神道を形に生かした經典でありまして、彼の鳥居といひ、鎮守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆清淨簡素といふことを尊んでゐます。そこにお詣りいたしますと、私たちの心は、自ら清々しい爽やかな氣分になつてしまふのであります。殊に、五十鈴川の清い流のほとりに、二千年の昔から鎮座まします皇大神宮に詣りますと、何人も西行法師と同じやうに、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

情操

心ともがな

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに感ぜられる尊い心が、即ち日本人の神に對するありのままの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも、

浅みどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

といふ御歌がありますが、この氣分をもつてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拜誦しますと、いかにも清らかに爽やかな大御心を偲び奉らざるを得ないのであります。思へば、もう十數年の昔になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。



それは明治天皇の御一年祭の行はれた時のことでした。ある小さい田舎町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、ほどよく隔たつたところに並びました老若男女は、その町長を首として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。

その式に遅れた町民たちは、いづれも靜に榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳くらゐの八百屋さんがありました。つゝましまやかに祭壇の前に立つて、伏し拜みましたが、やがて徐に、左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑を取り出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一步退いて

一禮して立去つたのであります。これを目撃しました私は、誠に涙ぐましい感にうたれたのであります。

皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゞへられてゐるのであります。私たちは、この心を日々の生活にうつしまして、物を清らかにし、心を爽やかにして、偽らざる力強い社會を築いてゆきたいものであります。私はこの爽やかな心を基礎とした生活を、常に、快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なところに、一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

(ラヂオ講演集)

「日本人の眞の姿」  
助動詞 (口語)  
ます  
れる  
た  
ない  
たい



高島米峰

名は大圓、新潟縣の人、明治八年生、思想家。

哲人

聖徳太子

用明天皇の第一皇子、厩戸皇子、推古天皇の二十九年(二六二)薨御歳四十九。

鴻業

憲法十七條

推古天皇の十二年(二二八)四月。

基調

闡明す

官位十二階

推古天皇の十一年(二二七)十二月。

人材登用

閥族跳梁

### 四 哲人聖徳太子

高島 米峰

私の最も崇敬する偉大な哲人を過去にもとめて、私はまづ聖徳太子を挙げざるを得ない。聖徳太子の偉徳鴻業は山の如く高く、海の如く広く、到底筆紙のよく盡くすところでないが、憲法十七條を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現のためには、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要を認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して建國の精神を振作し、また官位十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、内政を充實し給うたので、日本の面目

はこゝに全く一變するに至つたのである。たゞにそればかりでなく、當時世界の最大強國として、最も文化の進化した支那——支那は恐らく日本をその屬國くらゐに



聖徳太子御像

しか考へてゐなかつたであらうほど、それほど日本の世界的地位は低いものであつた。——と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖徳太子の偉大性の、いかにおどろくべきものであるかを看取せしめられるのである。

「太子の偉業」



推古天皇  
第三十三代

小野妹子

近江國滋賀郡小野村  
にゐたので小野と稱  
する。

隋

支那に於ける國號。  
武徳元年(二三〇)唐に  
滅ぼされた。

大業三年

紀元千二百六十七年

冒頭

聖德太子は推古天皇の十五年に遣隋使發遣のことを決定し給ひ、小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發した。この年は隋の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、

日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや。

とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那はみづから中國を以て任じ、東夷・南蠻・西戎・北狄と、四方の國々を野蠻國あつかひにしてゐたので、日本のごときも、いはゆる東夷の中の一つくらゐにかんがへてゐたのであらうが、その日本から、突如としてかうした對等な禮を以て書

を贈つたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれをしりぞけたのである。が、しかし、これほどの國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化を持ち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があるとおもつたのであらう、斐世清といふものを使者としてわが國に遣すこととなり、斐世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に著いたのである。この隋使斐世清の報告が、日本を隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふもつとも重要なものであつたので、聖德太子はその待遇については、すこぶる心をお籠めになつたらしい。まづ朝廷では飾船三十艘を以て



江口  
淀川の河口。

海石榴市  
奈良縣磯城郡、今三  
輪村大字金屋の中。

綺羅星の如し

一行を難波の江口にむかへさせ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇到らざるなく、また彼が都に入るときには、飾騎七十五匹を以て、これを大和の海石榴市の衢にむかへ、天皇の謁を賜ふときには、有司百官が定められた冠位にしたがつて、綺羅星のごとく宮廷に居ならんだといふので、さすがの斐世清もすつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使としてふたゝび小野妹子を遣すこととなり、その時妹子の持つて行つた國書は、これもやはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も、斐世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なし

〔太子理想の實現  
日隋對等の國交〕

に、對等な國交をむすばなければならぬことになり、隨つて支那は、日本を完全な獨立國として、認めなければならなくなつたのである。これ實に、聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現したのであつて、わが國が金甌無缺な國體を維持して今日に至り、更にその天壤とともに窮りなきを期し得られるのも、これ等に淵源するところがすこぶる多いのである。

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奨励でも、歴史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、曆法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも、もつとも重要なものは即ち



「天皇中心主義の徹底・佛教の興隆」

天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは即ち佛教の興隆、最もはなやかなものは即ち日隋對等な國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讚嘆したてまつる所以なのである。

惟ふに、日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帯びさせられた方は、僅にお三方しかましまさぬ。しかも、その中のお二方が、皆二十代の青年でこの大任を帯び給うたといふことは、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。そのいはゆる攝政皇太子のお三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、齊明天皇の攝政皇太子中大兄皇子、大正天皇の攝政皇太子裕仁親王殿下にま

龜鑑

齊明天皇

第三十七代

中大兄皇子

舒明天皇の皇子

裕仁親王

今上陛下

英邁

「最も尊い龜鑑」

しまし、聖德太子は二十歳、中大兄皇子(後の天智天皇)は三十歳の時に、そして、私たちの敬愛し奉る今上陛下は二十歳の時に、攝政の大任を帯びさせられることとなつたのである。聖德太子攝政の時代にも、中大兄皇子攝政の時代にも、日本が内に充實し外に躍進したといふ事實から考へ合はせて、どうしても昭和の日本もまた、わが聰明英邁にわたらせられる今上陛下の御威徳によつて、更に一段と内に充實し、外に躍進すべきことを確信せざるを得ないのである。



卷末地圖參照

徳富蘆花

名は健次郎、熊本の  
人、小説家、昭和二  
年歿、年六十。

風(國字)

逗子

神奈川県三浦郡逗子  
町

五 相模灘の落日

徳富蘆花

秋冬、風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、逗子の海濱に立  
つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のま  
た多かるべしとは思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、其の全く沈み終るまで三  
分時を要す。日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山煙  
の如く淡し。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山次第  
に紫となる。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山紫の  
肌に金煙を帯ぶ。此の時濱に立つて望めば、落日海に流  
れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱

赫焉

燃え。  
(燃ゆ)

已—已—已

銜(金)

一帯、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人とい  
はず、轉りたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉と  
して燃えざるはなし。かゝる風の夕に落日を見る身は、  
恰も大聖の臨終に侍する感あり。莊嚴の極み、平和の至  
り。物あり融然として心に浸む。喜といはんは過ぎ、哀  
といはんは未だ及ばず。

已にして、日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽  
ち藍色に變ず。唯富士の嶺、舊に仍つて紫の上に更に金  
光を帯ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば、  
海に浮かべる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、







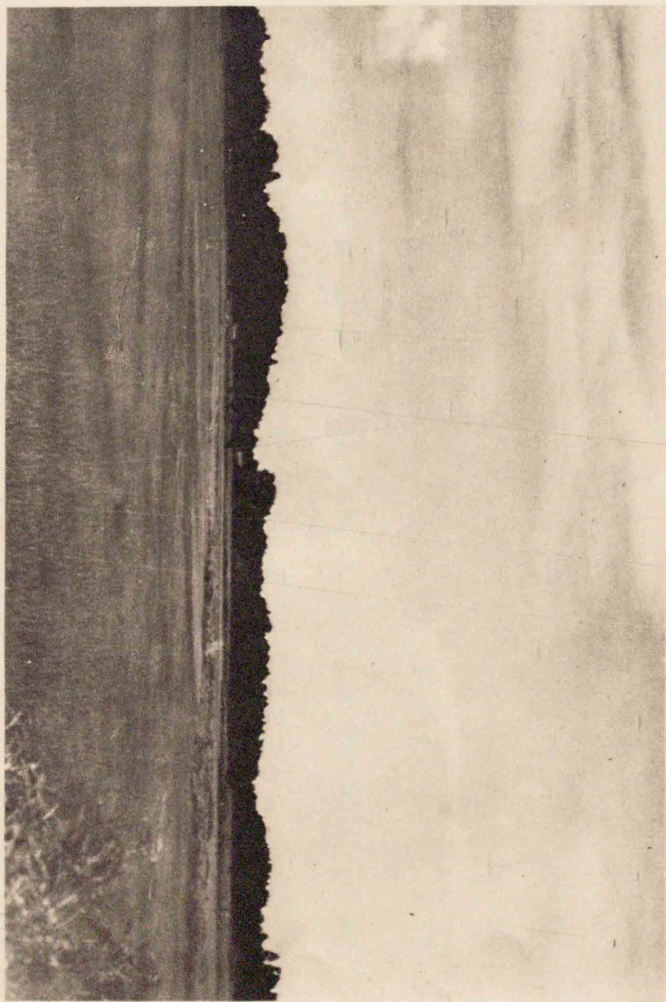
那須野  
栃木縣那須郡にある  
平野。

日本にこのやうな處が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。その外どこにあるか。林と野とが斯くもよく入り亂れて、生活と自然とがこの



國木田獨歩

やうに密接してゐる處が何處にあるか。されば、君若し一の小徑を行き、忽ち三條に分れる處に出たならば、困るには及ばない。君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或はその路が君を小さい林に導くかも知れない。迷はず行き給へ。



武蔵野



林の中程に到つて、又二つに分れたならば、その小さい路を選んで見給へ。或はその路が君を妙な處へ導くかも知れない。それは林の奥の古い墓地で、苔蒸す墓石が四つ五つ並んで、その前に少しばかりの空地があつて、その横の方に女郎花などの咲いてゐるといふやうな處だ。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて、君の前方に見渡しの廣い野が展ける。足許からすこしだけ下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つてゐる。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々



しい雲が集まつてゐて、雲の色に紛まがひさうな連山がその間に少しづつ見える。十月小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよ〜と吹く。若し萱原の方へ下りて行くと、今まで見えた廣い景色が隠れてしまつて、小さい谷の底に出るだらう。思ひがけなく、細長い池が萱原と林の間に隠れてゐたのを發見する。水は清く澄み、大空を横切る白雲の斷片を鮮やかに映じてゐる。水の畔には枯蘆が少しばかり生えてゐる。この池の畔の徑を暫く行くと、又二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂、君は必ず坂を上るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い處〜と選えらびたくなるのは、何とかして廣い眺

諦める

望を得たいと求めるからで、しかも、その望は容易に達しられない。見下すやうな眺望は決して出て來ない。それは初めから諦めたがいゝ。若し君が何かの必要で道を尋ねたく思ふなら、畑の中にある農夫に聞き給へ。農夫が四十歳以上の人であつたら、大聲を揚げて尋ねて見給へ。驚いて此方向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽子を取つて慇懃おぼやに問ひ給へ。大様に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖だから。教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へてくれた道は餘りに小さくて、少し變

慇懃  
大樣



すげなく

だと思つても、そのままに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。なほ變だと驚いてはいかぬ。その時、農家でまた尋ねて見給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ。」と、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覚えのある往來だ。成程これが近路だなど、君はすぐ微笑をもらすに相違ない。そのとき始めて教へてくれた道の有難さが解るだらう。眞直な路で、兩側ともに十分に黄葉した林の四五町も續く處に出ることがある。この路を獨り靜に歩むのはどんなに楽しからう。右側の林の頂には、夕陽が鮮やかに輝いてゐる。折々落葉の音が聞えるばかり、四邊はしんとして、いかにも淋し

山鳩



い。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落ち盡くした頃ならば、跡は落葉に埋もれて、一足毎にがさくと音がする。林は奥まで見透かされ、梢の先は針のやうに細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、偶、一羽の山鳩の遽しく飛び去る羽音に驚かされる。同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところ、今の武藏野に過ぎない。まさかに行きくれて困ることもあるまい。歸りもやはりあらましに方角を定めて、別の路を當もなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を獲ることがある。日は富士の背に落ちようと



暗澹

山は暮れて  
與謝蕪村の句

音便

選んで  
取つて  
咲いて

してまだ全く落ちず、富士の中腹に群る雲は黄金色に染まつて、見るがうちに様々の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つて、終に暗澹たる雲の中に没してしまふ。日は落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとして寒さが身に沁む。その時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にもその梢から月を吹き落しさうである。突然また野に出る。君はその時、

山は暮れて野はたそがれの薄かな  
の名句を思ひ出すだらう。

(武藏野)

落合直文

宮城縣の人、國學者  
明治三十六年歿、年  
四十三。

いみじう

七 萩 の 家

落合 直文

わが庭に一もとの萩あり。秋ごとにその色いとふかく、枝などのしげれるさま、いみじううるはし。朝におきてそれをながめ、夕にたち出でてこれにうち對ひたるこち、たとふべきものなし。おのれ家の名を萩の家とよべるもこの萩のためのみ。他にまたなにのこゝろかあらむ。一とせ飯田町に住みけるに、枝いたくおひしげりて、花もやゝほころびそめたり。明日、明後日はさきのさかりならむといひあへりしに、俄に野分の風ふきたちて雨さへふりそはりぬ。われは妹をかたらひ、共に庭にお

さきのさかり

あへりし



はづす  
とよめく

りたちてそを防ぎぬ。竹もてこ、その戸はづせなど、うち  
とよめきたるその聲、今なほ耳にあり。その後、ほどなく、  
妹は世になき人となりぬ。



落合直文

さだめなき旅のなら  
ひ、家をうつすこと、一と  
せに二たび三たびは常  
のことなり。佐土原町・  
拂方町・大門町など、幾度  
かうつりたり。されど

その萩ははなたず。今の掃除町の庭にあるもやがてそ  
の萩なり。その萩は、秋ごとに花さけり。その花はその

やがて

いかでか・あらむ

色舊時にかはることなし。たゞ、その萩にうちむかふ我  
がこゝろは舊時にくらぶればいたくことなり。そは妹  
のこの世にありしほどは、はぎの花は、我が心をよろこば  
しめしに、妹のうせにし後は、我が心をかなしましむるが  
如し。さきのはぎと今のはぎとかはりあるか。いかで  
かそのはぎにかはりあらむ。さては、よろこばしと云ひ、  
悲しと云ふは、皆、わが心からならむ。

末つかた

おどろくしく  
高等中學校  
當時第一高等中學校  
教授であつた。

或年九月の末つかた、朝九時ごろより、そのけしき、ただ  
ならずとおもひしに、雨ふり出で、風吹ききたりて、その勢  
おどろくしく、ひるつかたより、いよゝはげしうなり  
ぬ。おのれ、高等中學校にありしが、萩のこと、心にかゝら



たふれ

ぬにはあらねど、授業ひまなく、午後二時ばかり家に歸りぬ。さて庭を見るに、垣たふれ壁くづれ、例の萩など目もあてられず、あはれ、妹の世にありしころは、風も防ぎ雨もふせぎてありしに、けふかくはかなくなりたるは、げにくちをしき限りなりとて、その夜はねもやらず。さは云へ、風に吹きをられたりとて、その萩の幾部分は必ずうるはしうさきいでなむ。ことしの秋は、さかずとも、またこむ秋は必ず咲きなむ。たゞかなしきはかのかへらぬ人の上にくそ。次の日、この文をかきてありしに、例の下枝のあたり朝露こぼれたり。萩もまた心なきにはあらざるらむ。

(萩の家遺稿)

いでなむ

…にくそ

あらざるらむ

助動詞(文語)

なり

き

ず

### 八 我が幼時

寛永寺  
今東京市上野公園に  
ある、東叡山と號す、  
關東天台宗の總本山

我が幼きころ、上野物語といふ草紙ありき。これは、寛永寺の花見に、人の群り來ることどもをしるししものなり。我が三歳なりし春のころにや、火燧に足をさしはらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙をもとめてすきうつしけるを、母にておはせし人の見たまひ、十が中一二はまことの文字もあるを、我が父に見せまゐらせしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞きつたへて、その寫ししものどもをとりつたふることになりたり。我が十六七歳のとき、上總國にゆきしに、あそこにて、そのうつししも



のを見ることを得たりき。又そのころ屏風に我が名を  
題せしに、二字はその體をなしたるもの、後までありし  
が、火に焼け失せたりければ、今はそのころのものは我が  
許には遣らず。



新井白石

この後は、常の戯に筆とりて物書  
く事のみ習ひければ、自ら日々文  
字を見識りたれど、物讀む師友とす  
べき人なかりしかば、たゞ往來物の  
類などを讀み習ふのみなりき。

戸部の家人に富田とて、生國は加賀國の人と聞えしが、  
太平記の評判といふ書を傳へて、その事を講ずるあり。

往來物

戸部

上總久留里侯土屋民部少輔利直

富田

はじめは小右衛門某といふ。後に覺信といふ(原註)

更けぬれど

奇特

上松

忠兵衛某といふ、駿河今川の家人上松が後にて、連歌などもこのみて、物よく書きし人なりき(原註)

教へられし

きかせたりき

學ばしめらるべ

頑

夜々に我が父など寄りあひつゝ、その事を講ぜしめらる。  
我が四五歳の時に、毎にその座に侍りてこれを聽くに、夜  
いたく更けぬれど、遂に座を去りし事もなく、講畢りぬれ  
ば、その義を請ひ問ふ事などありしを、人々奇特の事なり  
といひき。

六歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などあり  
しが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解ききかせしに、  
やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも  
講じきかせたりき。「この兒文才あり、いかにも師を選び  
て學ばしめらるべし。」など、彼の人もいひしかど、頑なる  
昔人達のいひしは、昔より言ひ傳へし事あり。利根・氣根・



學匠

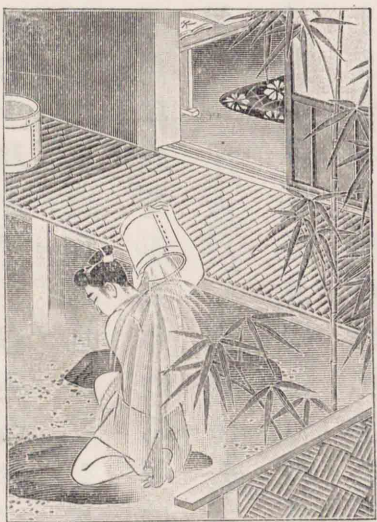
利根こそ……あ、

黄金の三こんなくしては學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根の事も料り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。」などいひあへりしに、我が父も、「戸部の御いつくしみによりて、常に側を離れまゐらせず、學に入れ師に従はしめん事もかなふべからず。されど、をさなきより、物書く事をば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて、物をば書き習はしめたくこそ侍れ。」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふ事ををしへしめらる。

その冬の十二月半ば、戸部歸り参り給ひしかば、常に側

を。さなし

業ををふ  
業終る



白石の勉強

に侍ふ事故の如く、明くる年の秋、復國にゆき給ひしあとにて、課を立てられて、日の中には行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書き出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課業未だ満たざるに、日暮れんとすること度々にて、西向なる竹縁のある上に、机を持ち出でて、業ををへぬることもありき。又、夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられし者と竊に謀りて、水二桶づつかの竹縁に汲みおかせて、



大やうに

いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄てて、先づ一桶の水をかぶりて、衣うち著て習ふには、はじめ冷やかなるに目さむる心地すれど、暫し程経ぬれば、身暖かになりて、またくねむくなりぬれば、また水をかぶること先の事の如くす。二たび水をかぶりぬる程には、大やうに課をも満てたりき。これ我が九歳の秋冬の間の事なり。

かたのごとく

かゝりしほどに、この頃よりは、我が父の人におくりたまふ文をば、かたのごとくには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來をならはしめられ、十一月に至りて、十日の中に淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられしごとくに事を終へしかば、冊になして戸部に見

庭訓往來  
一月から十二月に至る漢文の書簡文を集めた書

大方ならず

せまゐらす。ほめたまふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、大方は我に命ぜられき。

わぬし

また、十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子どもは、太刀打の業にすぐれて人に教ふことありしを、我にもこの業教へられん事を望みしに、「わぬしいまだ幼し、是等の業學ばんこと遅からず。」といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀脇指腰にせんも誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所誠にしかなり。」とて、一つの業を傳へて習はしめたり。かかりし程に、その歳十六になりし者の、我と藝を試みんと

さこそ侍るべけれど

十六になりし者  
神戸といひしもの  
二男なり。(原註)



得たりしにぞ……  
ける

いひしかば、木刀をとりて、三度あひて三度まで勝つ事を  
得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひたりける。その  
後は常にかゝる武藝の事どもを好みしかど、物讀む事を  
も好みければ、常に我が國の物語草紙の類をば見ずとい  
ふものもなかりき。

若侍

長谷川といふものな  
り。(原註)

翁問答

中江藤樹著、五卷、  
儒教の大意を老翁の  
物語に托し、假名書  
に和らげて記す。

事をかするしぬら  
ん

京の人

江馬益庵といふ、名  
は玄牧。(原註)

十七歳の時に至りて、同じやうに召し使はれし若侍の  
許に行きしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せし  
ものなり。如何なる事をかするしぬらんと思ひて、借る  
事を得て、家に携へ歸りて見けるにこそ、始めて、聖人の道  
といふものある事をば知りけれ。これより、道に志切な  
りけれど、師とすべき人もあらず。京の人にて醫を業と

小學

六卷、支那古來の嘉  
言善行を輯む。

四箴

支那宋の程頤の視聽  
言動の四箴をいふ。

四書

大學・中庸・論語・孟  
子。

五經

易經・書經・詩經・春  
秋・禮記。

韻會

支那元の熊忠撰、漢  
字典。

字彙

支那明の梅膺祚撰漢  
字典。

折焚く柴の記

新井白石の隨筆。  
新井白石一名は君美、  
江戸の人、徳川中世  
の政治家、儒者、享  
保十年三六、歿年六  
十九。

助動詞(文語)

らる  
べし  
たり  
らん  
しむ

少し學問あるが、戸部の許に、日々來れるあり。この人  
に向ひて志の程を語りしに、小學の題辭を講じきかせら  
れたり。その後、又程子の四箴をも講じきかせられしよ  
り、やがて、小學の書を日夜に誦し習ひて、業既に畢りぬれ  
ば、四書を誦し習ひ、その後また五經をも誦し習ひたれど、  
此等皆々句讀を授けし師あるにもあらず、自ら韻會・字彙  
等の書によりて誦し習ひければ、後に思ふに僻事のみぞ  
多かりける。

(折焚く柴の記)



島崎藤村  
名は春樹、長野縣の  
人、明治五年生、小  
説家。



通うた

### 九文章の道

島崎藤村

一

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験の無かつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通うたうちに、向うの河岸まで泳ぎ越す事が出来た。更に又一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた水瀬の速い遅いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと温いとも分つて來たし、水鳥の様に浮きつ

沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出来た。板子無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行けるところ迄は、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなかつた。容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、たれにでも到達し得られるやうな境、地があるに相違無い。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違無い。

二

「文章道と根氣」



小諸  
信越線の一驛、小諸  
町

信州の小諸こもろに居た頃、私は弓を稽古したことがある。たれでも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼むところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正す事を私達に教へて呉れた。それからの私達の矢は、假令的を貫くことの出来ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行

焦心

「好い文章は自己を  
正してから」

くやうになつた。これは文章の道にも當て候あめて見ることが出来る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦せう心しんすることは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

三

裏掘

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鋤をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘り起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗

掘堀





や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、肥料をかけに行つた。馬鈴薯の花が白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つもくく根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く伸びて、人の脊よりも高く絡みついた。畠の中には、嫩く生つたのを摘む缺の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じ

「試みるは悟るの初」

られるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出すことが出来る。われくが文章の手本とすべきものは、何程われわれの周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初めである。

四

浅草の新片町に住んだ頃、家は浅草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界限かいはんを漕ぎ廻つたことがある。最初めのうちは無暗と手足を動かさし、あの長さ一丈ばかり

浅草橋  
神田川の下流に架した橋。  
兩國橋  
隅田川に架した橋、日本橋區から本所區へ通ずる。  
界限





「簡素の美」

弄(升)

もある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押し出すことが出来るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いで行く楽しみなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。「簡素の美がある。文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の「表白」とは成らない。眞に好い文章には眞に好い「結晶」の力がある。

(飯倉だより)

一〇句讀點

薄田泣菫

薄田泣菫  
 名は淳介、岡山縣の  
 人、明治十年生、小  
 説家、詩人。

文章を書くものにとつて、句讀點ほど疎に出来ないものはない。合衆國政府はこの句讀點一つで二百萬弗損をした事がある。

何時だつたか、同國の政府が、外國産の果樹を成るべくどつさり移植して、かうした果物の供給で餘り外國に金を拂ひたくないといふので、外國産の果樹輸入は無税にするといふ海關税法を拵へた事があつた。バナナや蜜柑を安く食はうといふには、こんな結構な規則は滅多に無かつたが、肝腎の法文を印刷する場合に、どう違つたも

蜜—密  
 食はう  
 肝(肉)  
 腎(肉)



近松門左衛門  
 杉森信盛、號は巢林  
 子、戯曲作者、享保  
 七年(三六三)歿、年七  
 十二。  
 呢 懇



江戸時代の眼鏡

のか、外國産の果樹「フォリンフルトプラント」といふ言葉の中に句讀點が一つ挿まつて「フォリンフルトプラント」となつて、そのまゝ世間に公布せられてしまつた。さあ、外國産の果物が無税になつたといふので、蜜柑や葡萄やレモンやバナナといふやうな果物が、大手を振つてどんく入つて來た。それと氣づいた政府が法文を訂正するまでに、關稅の收入がいつもよりざつと二百萬弗少くなつてゐたさうだ。

句讀點といへば、ある時、近松門左衛門の許に、かねて呢懇の數珠屋が訪ねて來た。その折、門左は鼻先に眼鏡をかけて、自作の淨瑠璃にせつせと句讀點を打つてゐた。

數珠屋はそれを見ると、急にきいた風な事が言つてみたくなつた。

「何やと思つたら句讀點かいな。そないなもの、漢文には要るかも知れへんが、淨瑠璃には要らんこつちや。つまり隙潰しやな。」門左はひどく癩に障つたらしかつたが、その折は唯笑つて濟ました。

それから二三日過ぎると、數珠屋あてに手紙を一本持たせてやつた。數珠屋は封を切つてみた。手紙は數珠の注文で、なかに「ふたへにまげてくびにかけるやうなじゆず」といふ文句があつた。數珠屋は、三重に曲げて、首に懸けるやうなとは随分長い數珠を欲しがるものだと思



つたが、早速そんなのを一つ拵へて持たせてやつた。すると門左は、注文書に違ふと言つて返して來た。數珠屋は蟹のやうに眞赤になつて、皺くちやな注文書を擱んで門左の許に出掛けた。門左はじろりとそれを見て

「どこにそんな事が書いてあるな。『二重に曲げ、手首に懸けるやうな』とあるぢやないか。だからさ、淨瑠璃にも句讀點が要るといふのぢやよ。」

(茶 懸)

二 靜

觀

若山 牧水

若山牧水  
名は繁、宮崎縣の人、  
歌人、昭和三年歿、  
年四十四

醱 酵

歌が作りたいたいといふ氣持がして、さて作る手蔓を得るに苦しむ場合がある。その時には、手帳を懐にして戸外に出るがよい。作りたいたいといふ一種の醱酵した氣持の時、眼に觸れるものは、大抵作歌の材料となり得るものである。昔の歌などでは、「何の歌を作る。」といふ事がまづ問題であつたやうだが、新しい歌では、「何の」といふ事は殆ど問題にならぬ。即ち材料は何でもよい、たゞ作る人の心それ自身が問題となるのである。「何の歌は問題ではないが、どう詠むか。」「どんなに詠むか。」が問題である。



詠む態度と詠む技巧とが主となつてゐるのである。それで、詠みたいといふ心が萌してゐる時には、餘り材料に選り好みをしてゐないで、まづその詠みたい心を満足させるまで、手當り次第に作るがよい。門を出ると桐の木がある、その桐の白い幹を詠むもよい。桐の根もとには大きな新しい枯葉が落ちてゐる、その落葉を詠むもよい。その落葉のかげには白い草花が咲いてゐる、それも十分歌になる。花のかげの地は、かすかなしめりを帯びて、朝の日影を受けてゐる、それもよければ、その地の上をはつてゐる小さな名もない蟲、その蟲を追つてゐる蟻といふやうに、心のまゝに詠み進むべきである。何を詠んでよ

いかかわからないといつて苦しむのは愚かである。詠みたいといふ心が出れば、それはなか／＼貴重な心である。——その心の消えぬうちに、何でもまづ詠むべきである。室内でも大抵の材料には事を缺かぬものである。が、若し室内にゐてその材料に困つたら、前に述べたやうに、室外に出かけるがよい。そして靜に眼の前のものに心を留めて、一首々と詠むがよい。

また、その詠みたいといふ心を誘ひ出すべき必要のある時もある。即ち、その下地はあつても、まだはつきりと詠みたいとまで心のまとまらぬ時がある。そんな時にも、私はこの「戸外に出でよ」と「寫生」とを勧める。



まづ「ものを静に観よ。」と、私はいひたい。門に續く杉垣の嫩芽、その側に立つて静にそれを視つめておよ、心は次第に洗はれてくるに相違ない。疲れた心にはかすかな活氣を感じはじめ、鈍い心には次第に感觸が生じ、視る眼を通して、心は知らず識らず新鮮になつてくるものである。さうして、捉へどころのなかつた、まとまりのなかつた心に、次第にまとまりがついてくる。心の目があるてくる。そこで「詠まう。」と思ひ立つて見れば、大抵はできるものである。私が「ものを静に観よ。」といふのは、いはば一の精神集注の法である。單に、かうして心をまとめる爲ばかりでなく、一步進んで、眼で見るまゝを一首に

まとめようと努めて見よ。さうしてできたのが、必ずしもいゝ歌だとは行くまいが、ものを観る眼を養ふ爲に見たまゝを歌に詠む練習をする爲に、初めはさうするのがよいと思ふ。

歌といふと、大層むづかしいもののやうに固くなる癖があるが、それはいけなない。平に、静に、常にその心を澄まして置いて、眼の前の草にでも、小鳥にでも、徐シヅカにものをいひかける氣持で作れば、易々と作れるものだ。

「氣を變へる。」「心を新しくする。」といふ事は、作歌の上には大切な事である。机に向つて考へ倦んだ際など、ふらりと戶外に出て冷たい風に吹かれると、さきに頭の痛

「心を澄ませて置いて物をいひかける氣持で作れ」



くなるほど考へこんだ時には、どうしてもできなかつた微妙な歌が、殆ど無意識に心に浮かぶ事などもある。何か用事のある時など、急いで路を歩きながら、あとからあとからと歌のできる事もある。で、歌心のある人は、ちよつと出るにも、手帳に鉛筆をば放さないがよい。ひよつと心に浮かんですぐ消えて行くやうな歌に、なかく棄て難い佳作がある。歌は、その歌はれた材料や趣向よりも、その言葉その調子が常におもなものであるから、ひよつと心に浮かんで消えるといふ歌などをば、そのできるとき、ふに何か記して置かないと、初め自然に心から漏れて來た微妙な調子をば、すぐ逸してしまひがちのも

## 趣向

「心に浮かんだらすぐ書きとめよ」

のである。かういふ趣向の歌であつたがと、その歌の筋をばあらまし覚えてゐても、それは多くは役に立たない。筋だけでは、最初心に浮かんだ時の微妙な心持がなかなか出ない。その心持は、大抵言葉や調子の上に含まれてゐるからである。散歩の時に限らず、夜床に就いてから、思ひがけず歌のできる事などもある。そんな時には、すぐ起き上つて紙筆を用意すべきである。明朝起きてからなど考へてゐては大抵失敗する。

散歩はまづ一人の方がよい。雑念を除いて徐に歩む。歩むにつれて心は次第に統一されてくる。さうした時、初めは少し無理でも、一首二首、眼前の物を何でも材料と



して詠んでみるがよい。初めその一二首の間は、一向おもしろくなくとも、さうして續けてゐるうちには、我知らず感興が湧いて、いつか本氣になつて作られるものである。散歩毎に必ずさうとは行くまいが多くはさうなり易い。いつの間にか、またさうした癖もつくものである。初めは努めてやつて見なくてはだめかも知れないが、とにかく實地にやつて見るがよい。

旅行は散歩の大なるものである。汽車の窓、汽船の室、またはぶら／＼と山を越えながら、次第に移り行く大きな景色を眼にしてゐると、努めずとも作りたくなるのが當然であらうが、さうでなくとも、前にいつたやうに、最初

強ひて

二三首強ひて作つて見ると、自然にそれにさそはれて作りたくなつてくるであらう。また繪葉書や手紙の端などに、何の氣なしに書きつけて出した歌に、極めて自然な佳い作を見る事もある。

抑へる

散歩にせよ、旅行にせよ、餘りに心を騒がせてはいけな  
い。餘りに思ひ昂つてはいけな  
い。自然に湧き上つてくる感興をも、力めて抑へるやうにして、靜に一首二首と詠んで行くべきである。作者自身餘りに興奮してしまふと、できる歌は極めて粗雑な概念的なものになりがちなものである。どうかすると、ゐても立つてもゐられな  
いやうな興奮を覺える事がある。私をり／＼さうい

概念的



ふ場合に出會つた。或時は、宿屋の二階で、ぢつと坐つて手帳に歌を書きつけておられないで、立ち上つて部屋中をそろく〜と歩きだしたけれども、力めて自分自らの興奮をかみ味はふやうな氣持で、稍、遠くに置いて眺めるやうな氣持で、手でさはるのも恐ろしいやうにして、その感興を守りながら、三首五首と作つて行つた。或時は、秩父の奥の溪間を歩きながら、これは三日間にわたつて續いた感興を守りながら、詠み耽つた事もある。こんなにして歌ができたすと、自分ながら神々しい氣に満たされて、自分自身の事も、なかく〜かりそめにはあつかひ得ないものである。

秩父  
埼玉縣秩父郡、海拔  
五〇〇米以上の山が  
多い。

「自然に湧き上つて  
くる感興を靜に詠  
んでゆく」

昔の言葉に、「歌人は、なながらにして名所を知る。」といふのがある。これは、優れた歌人は、直覺で以て、まだ見ぬ遠い地の景色をも知る事ができるといふ風にも解せられるが、事實はさうでなく、概念で以てその景色を想像し、そしてそれを歌に詠み得るといふ事に當るらしい。甚だよくない言葉である。世に名所と歌はれてゐるやうな大景を、概念で歌はうとしたところで、到底できるものではない。やはり實地に見て、實際に感じたところを歌はなくてはならぬ。

また初心の人は、何でも大げさに歌はなくしてはならぬものと考へる傾がある。これは歌といふとすぐ固くな

「實感を歌ふ」



「材料よりも作者の心」

るのとほゞ同じで、景色の歌を詠むとすれば、絶景・佳景でなくてはならぬやうに思ふ癖である。これも大變に間違つてゐる。前にもいつたやうに、歌に詠むに材料は問題でなく、常に作者の心が問題であるのだ。作者の心がよく澄んでよく張つて居れば、即ち十分に感動が發して居ればよいのである。だから、感動もなくて強ひてこしらへた富士山の歌よりも、十分な感動を以て詠んだ名もない丘の歌の方によいのである。景色がよいのに心を動かされたから、佳い歌ができたといふのならば當然だが、景色のよい所が詠んであるから佳い歌だと決していふ事はできない。心すべきである。(短歌作法)

二三 緋 絨 の 鎧

落合直文

緋絨の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山  
櫻ばな

佐佐木信綱

藤原の大宮どころ菜の花のかすめるをちの天の香  
具山

與謝野晶子

朝の雲いざよふもとにしきしまの天子の花の山ざ  
くら咲く



正岡子規  
天の下しらす日の御子その御子の生れましし日は  
常晴にして

金子薫園

大海の蒼く暮るれば夕月の光浮かべて波のよる見  
ゆ

尾上柴舟

神ながら神さびせすとわが大君冬の御苑に駒みそ  
なはす

若山牧水

うらくくと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれ  
る山櫻花

石川啄木

かにかくに澁谷村は戀しかりおもひ出の山おもひ  
出の川

北原白秋

不盡の山れいろうとしてひさかたの天の一方に立  
てりけるかも

齋藤茂吉

ゆらくくと朝日子あかくひむがしの海に生まれて  
あたりけるかも

木下利玄

遠かたの鍛冶屋かねうつ音すみて秋やうごく八  
月のする



川 田 順

さ庭べの冬青ふゆあざの木の花少しづつたえずこぼれて静  
けくありけり

窪 田 空 穂

春の雨降るとは見えぬ檜葉の葉に雫たまりて静に  
こぼる

長 塚 節

雀鳴くあしたの霜の白き上に静に落つる山茶花の  
花……

伊 藤 左 千 夫

よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよもして兒  
等が遊ぶも

一三 言葉の變遷

佐々 醒雪

佐々醒雪  
名は政一、京都市の  
人、國文學者、文學  
博士、大正六年歿、  
年四十六。

竹取物語  
作者未詳、かぐや姫  
の生ひ立ちから昇天  
するまでのことを書  
いた平安朝初期の物  
語。  
伊勢物語  
著者不明、在原業平  
の行跡を記した歌物  
語。

不思議なものは言葉の變遷である。日本語は幸にし  
て二千年近い記録を有してゐて、世界で頗る古い言語の  
一つである。しかも、萬世一系の帝室を戴いた同一民族  
の間にもみ發達したので、今から約一千年前に出來たと  
いはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は、今日  
も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國は、い  
ふまでもなく世界中にまたとはないのである。一千年  
前即ち十世紀前といへば、今の歐洲諸國などは、皆まつた  
くの野蠻國であつた。



いへあるじ

日本語はこんなに久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は甚だしく變化したものが多し。例へば、「いへ」といふ語などはその一例であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、随つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、即ち戸主のことであつた。然るに今日、「いへ」といふと、家屋、即ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我々が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのとは雲泥の違ひではないか。

薄倖者

雲泥の違ひ

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。

漢語がしきりに用ひられはじめてからも、同様の變化は認められる。例へば、「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑買が「御不用物はございませんか」と呼んで來る。然るに中古では「不用なるもの」といふと、用ひるに堪へぬと、んまかあはうのことで、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて、「不用」といふのは、いたづら者、または無法者の義である。鎌倉時代に、「不用なもの」は「ございませんか」と呼び歩いたなら、「いたづら者はゐないかね。」と呼び歩く鼠取藥の行商人と間違へ

爲朝

源爲義の第八子、武將、鎮西八郎と稱す、嘉應二年（八三六）歿、年三十二。

爲義

源義親の子、武將、保元元年（八七六）歿、年六十一。



矛盾  
藥罐

られたであらう。

これ等はまだ單なる變遷で、中には、その變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生じたものもある。漢方醫が廢れて、藥を煎じることがなくなつても、藥罐といふ名は残つてゐたり、その他不思議な言葉を列擧すれば、實際もないが、就中希代たなのは、「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器の出來ぬ頃、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに、日本で硬い上等のものが澤山出來るやうになると、御飯を食へるにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひはじめた。そこで、飯食茶碗

抹茶

とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日ではコーヒー茶碗とさへいつてゐる。御飯を食へるのやコーヒーを飲むのは、御飯碗・コーヒー碗とでもいひさうなものだが、さう理窟通りにゆかないのが言葉である。

「さかな」とは、本來酒を飲む時に食へるものといふ語である。「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物にするもののごとで、古は、野菜類は勿論皆「な」である。昆布や若布などの様な食へられる海藻は、皆磯菜といつた。それから、魚類は「な」の中の上等のものであるから、上等の建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」



上戸

贅澤

下戸

などいふ語は、これから來てゐる。然るに、酒といふものは上戸即ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類が「さかな」といふとにきまつてしまふと、下戸が食べてもやはりこれを「酒な」といふのは、飯を食べてもやはり茶碗といふのと同じ不思議である。

言葉はまた使つてゐるうちにだん／＼下落するものである。例へば、「大工」といふ語は、工たくみ即ち工藝家中の俊秀なものの尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。

棟梁

印半纏

轉訛

た。然るに、今日では、建築事業にたづさはるものは、小屋掛のたゞき大工でもやはり大工である。かの棟梁、親方なども同様で、今日は一人の手下もなく子分もない男でも、印半纏さへ着てをれば、即ち親方であり、棟梁である。

最後に一つ、故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意につくつた人爲的の言葉がある。一時兵隊言葉といつて、丸木橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止せられたやうだ。

その他には、迷信から來た變造語もいろ／＼ある。例



生え。

齋宮

へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を「悪し」と聞えるのを忌んで「わざとよし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるとして、「よ」といつたり、梨を「ありの實」硯箱を「あたり箱」鯛を「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の御所では、髪のない僧侶を「わざと髪長」といつた例もある。

要するに、言語の不思議な現象は、同一の語が例へば髪長といつて髪のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は、蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

### 一四 國語の力

上田 萬年

上田萬年  
名古屋市の人、慶應  
三年生、國學者、文  
學博士、東京帝國大  
學名譽教授。

標識

言語は、これを話す國民にとりては、あたかもその血液が肉體上の同胞を示すがごとく、精神上の同胞を示すものにして、これを物に譬ふれば、「日本語は日本人の精神的血液なり。」といふを得べし。日本の國體と日本の人種とは實にこの精神的血液をもつて維持せられ、結合せらる。

言語は、その國民の標識となるのみならず、これと同時に、また一種の教育者即ち情深き母ともなるなり。我等の生まるゝや否や、この母は我等をその膝の上に迎へ取



誰か・べき

り、懇に國民的思想と國民的感動とを教へこみくるゝなり。されば、この母の慈愛は、まことに天日の如しといふべきなり。苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるものは、誰かこの光を仰がざるべき。

いひつべし

言語には、我等が心中に一日も忘れかぬる生活、殊に人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念が、結合せられるものと知るべし。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れはてて、すやくと眠に就かんとする折、母君はいかに優しき聲にて「寢よ。」との歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心に悪ふざけなどして、うち廻れる時、嚴しき父君はいかに嚴に教訓を垂れ給ひしか。さては、春の麗かなる

頑是なし

反映す

野邊に友だちとげんげなどを摘み歩き、或は秋の日赤き垣根の下に餘念なく栗の實を拾ひし、その當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、何ともいはれざる快感を我等に與ふるなり。次には小學校、中等學校の言葉、次には學生の言葉、或は市民としての言葉、或は職業により、階級により、地方によりての言葉など、皆それぞれ、その生活をこの上に反映す。故に、外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみ受けたる人ならざる限りは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざるものはなかるべし。

されば、國民がその國の言語を尊ぶことは一の美德に



措く

愧ぢ。  
(愧づ。)

して偉大なる國民は、かならずその自國語を尊び、決してこれを措きて他の國語を尊崇せず。情の上より自國語を愛し、理の上よりその保護改良に従事し、もつて眞正の國民を養成せんことを努む。およそいづれの國を問はず、いやしくも國家的觀念の上より、その國民の一員たるに愧ぢざる人物の養成をもつて目的とする以上は、まづその國の言語、次にその國の歴史、この二つを蔑にしては、決して效を收むること能はず。これ國民たるものの須臾も忘るべからざることなり。

卷末地圖參照

藤樹先生

中江與右衛門、名は原、近江國の人、儒者、慶安元年(三〇)歿、年四十一。

秀で。  
(秀づ。)

熊澤先生

通稱次郎八、號は蕃山、岡山藩に仕へた儒者、元祿四年(三五)歿、年七十三。

一五 藤樹先生

中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生まれき。學は王陽明の流を汲みて、その徳行は一世に秀で、遠近みなその風を望まざるはなかりきといふ。

熊澤先生は藤樹先生の門人なり。此の人の藤樹先生に従はれし始めを尋ぬるに、其の頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預かり持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊る。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取



忘れたるにこそあれ

上げて見れば金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそ。」と思へば、其のまゝ榎木に走り行きて、飛脚の宿れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違なければ、其の金を取出して返しけり。



中 江 藤 樹

飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、喜びの餘り、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、「若し此の二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。されば、その恩なかなか言葉の言ひ盡くすべきにあらねども、先づ當座の御禮

當座の禮

こしらへ言ふ

中江藤樹筆

主 信 忠

玩 人

玩 物

喪 志

喪 德

までに贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚きし顔色にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮と言ふことあるべき。」とて、手にだに取らず。いろくこしらへ言へども、更に受けずして歸らんとする故、已むことを得ず、十兩と減じ、五兩となし、三兩となし、段々減じて終には金二歩となし、せめてこればかりは我が心のよろこびなれば受け給ふべし。さなくては、我が心も濟み申さず、今宵も寐ね難し。」と、理



中 江 藤 樹 筆



鳥目

を盡くし詞を盡くして言ふにぞ、此の金を受け、申す、ほど、ならば、二百兩をも留め置き申すべし。斯くかへし申すからには、聊かにも謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして、餘儀なく宣へば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。これは今夜休むべき所を是まで追ひ掛け來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば申し請くべし。」と言ひて、二百文にて酒を買ひて其の人に振舞ひ、我も酔ふほど飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へ兼ね、さるにても、そこは如何なる人にておはする。」と問ふに、「名あるものにあらず、また何一つ知れる者にあらず。たゞ、我が在所の近所に小川村とい

如何なる、おはす、る、

在所

無理・非道

ふ所あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聽き侍りしに、「親には孝を盡くすべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理・非道は行ふべからず。」などといふこと常に語り給ふにより、今日の金子も我が物に非ざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり。」と言ひ捨てて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さて。此の度は辛き命生き延びて、各方にも對面することとなりぬ。」とて、ありし次第を委しく語りけり。折節、其の家の裏に、熊澤次郎八、田舎より上りゐて、學問修業最中なり



人こそなれ

隨從

辭む

備前

こゝは岡山藩主池田侯をさす。

動詞(文語)

堪へ  
死す  
佇む

東遊記

五卷、橋南谿の東北方面漫遊紀行録。橋南谿—宮川春暉、伊勢國の人、醫師。文人、文化二年(西曆一八六五)歿、年五十三。

しが此の物語を聞きて、其の人こそ誠の儒といふものなれ。」とて、其の翌日江州小川村を尋ねて隨從を願はれしに、「人に教へ申すべき程の學徳なし。」とて、更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母之を氣の毒がり、とにかくに先づ内に入れ申せよ。」とありし故、辭み難くて内に入れ、終に師弟の契約をせられけりとぞ。  
其の後、藤樹を備前より招きたまひしに、其の身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふ者あり。御役にも立つべき者なり。」とて熊澤を出されけり。いづれも格別のことなり。

(東遊記)

村井弦齋

名は寛、愛知縣の人、文久三年生、小説家。

拂はまし

凜冽

蕭條

白皚々

一六 雪のわかれ

村井弦齋

「雪ならば幾たび袖を拂はまし、花の吹雪の滋賀の山越。それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚を裂く。辛苦の内に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間に隠れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば、白皚々たる比良の雪、今より此の山路に掛らば、山中にて日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本邊にて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨



山路へこそは掛り  
け、れ

んで暫く湖畔に立ちたりしが、やゝありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しく此所に留らん、夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ、いで、心を取直し、今宵の中に此の山を越えんものをと、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて只一人、辿り辿りて行く道の、岩に躓き、木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、猶も心を勵まして、風雪の中を登り行く。聽て日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌増す寒さは骨に徹りて手も足

閉ぢ  
づ

も凍るばかり。一山寂莫として、耳に答ふる者としては、閉ぢし氷の下潜る細谷川の水の音、杉の枯葉をならす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響、なんと、幽に物凄



郎太藤の中雪

く聞えて、怖ろしとも悲しとも譬へん様なし。斯かる難處と知りもせば、麓にて一夜を明ししものを、旅馴れぬ身の悲しさ、足に任せて此の深山路へ掛りしが、今は足疲れ



出でられず

身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷まりて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れた。起きも得上らず、少時降る雪をうらめしげに眺めてありけるが、腹は次第に饑を感じて、寒さは一入身に沁み渡り、眠るとも無く死ぬとも無く、暫時は前後も知らずなりにけり。

懐かしの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲れ打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起き出でず。彼の家は我が友の家なりけり、此の家にはわれに優しき老人有りきなど

と、昔の事を想ひ出でて、そらに哀を催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて復昔日の觀に非ず。柱も傾ける處あり、築地も崩れたる處あり。前庭の古松、刈る人無ければ枝繁れり。脩竹一叢思ふ儘に根を延ばして、彼方此方に生え出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起き出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井の軋る音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母人なり。少年は忽ち胸塞りぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出

衡門

脩竹



でられしこと無き母様が、此の雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情無しと湧き出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈け行きて、後より其の袂を引き、母様が私に汲みませう。」と涙ながらに取絶る。

事の不意なるに母は驚きて振り返り、たれか藤太郎、如何して此處へ。」藤太郎は細き聲、はい、母様の御手助を致しに参りました。先づ内へお入り遊ばせ、お頭髮へ雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も母を此の雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱を確と握りし儘石の如く立てり。「祖父様とでも御一緒か。」いえ、一人で御座います。」母は聲を上げまし、祖父様が一人和郎をお出しなさ

立たしめざらん

れたか。「いえ、祖父様には知らせずに参りました。」母は眉を揚げ、怪しからぬ、何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が歸つた譯を。いえ、此處で聞きませう。聞かない内は滅多に家へは入れません。」颯と吹き来る朝風に、地上の雪はくるくると捲き揚げられて、横に二人の顔を撲つ。

藤太郎はありし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根にすゝろに涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん態と言葉を上げまして、和郎は此の母の言葉を忘れましたか。和郎を祖父様に頼む時、一旦國を出たからは、天晴立派な人にならない内は、決して中途で歸るなど、あれ程堅く言



大洲

愛媛縣喜多郡大洲町



ひ聞かせた事を忘れましたか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯和郎を立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居て手助を仕てくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で来たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び逢ひません。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい。」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力抜けて雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる様子を見て、痛はしさ胸に満ち、斯く迄我が身を思うて來たりしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も辛き事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせん

千仞の谷

かと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽にして思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落とすと聞くものを。「和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と強くは叱れど、聲は沾みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微なる聲にて、「はい、解りました。」それならば今から歸りますか。藤太郎は悲しき聲、「はい、歸ります。」と、素直に言ふ。母は素直に答へられては、猶更腸の絞らるゝ思。遂に堪へ兼ねて、忍び泣き、袖咬みしめて、聲を吞む。

藤太郎は屹として立ち上れり。「母様、此の薬は皸の妙薬で、世にも得難き品、これ差上げたいと態々持つて参り



ませう

ました物。これだけはお取りなされて下され。」と新谷にて得し妙薬を差出す。母は快く和郎の志、これだけは受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さん、とて上を向く。見合はす、顔互の眼には涙一杯。母は恥づかしと、ちつと耐ふる心の苦しき。子は堪へざりけん、薬を手より取落してうつ向けば、雪の上にはほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心をはげまして、泣くく我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。満天の風雪路悠々。

助動詞(文語)

けり  
たら  
しる

一七 誠 の 説

一勺の水を海に入れて、海の水増したりといはんは愚なり。増さずといふも妄なり。水を加ふる所は我にして、増すと増さざるとは我にあらず。我にあらざるものは強ひて其の辨を求めずして可なり。我にある所の誠を盡くす、これ君子の道なり。誠とは虚言を言はざる事とのみ心得たらんは、愚かなる事なり。或人、司馬温公に誠に入る道を問ひければ、「妄語せざるより入る。」とぞ答へける。げに妄に語らず、虚言を言はぬより、誠の道には入るなれども、虚言を言はぬを誠とは言はぬなり。偽を

或人云々

劉安世光ニ一言以テ終身之ヲ行フベキモノヲ問フ。光曰クソレ誠カト。安世其ノ從ヒ入ル所ヲ問フ。曰ク妄語セザルヨリ入ルト。(宋鑑)

司馬温公

名は光、支那宋代の政治家・學者。(西暦1091-1156)



「我にあるところの誠をつくす」

瘁く

衛の靈公

支那春秋時代に於ける衛の君 名は元西曆前四九三年卒此の話は小學の内篇に見えてゐる。

言はぬに對する信は小さし。偽なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至つて小さきものなり。地に落さば目にかゝらぬやうなれども、内に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隠すべからず、味ますべからず、覆ふべからず。其の時、到るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。其の子を水に腐らし、火に焼きて、芽を出さずといふは、その子の咎ならんや。是によりて、物の子を實といふ。實は即ち誠なり。少しにても誠ならざるもの交りて、腐りたるものは、芽生せず、痛みたるは瘁く。人の誠も猶此の如し。

昔、衛の靈公といひし君、夜、夫人と共に坐し給ひけるに、

蘧伯玉

名は瑛、衛の賢大夫。

禮

禮記、四十九篇、五經の第一、支那古代の禮書。

遙に車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり。靈公「誰なるべきか」と夫人に問ひ給ひければ、是は蘧伯玉なるべし。禮に「下公門、式路馬」といふことあり。「忠臣、孝子、不爲昭々、信節、不爲冥々、惰行」といへり。蘧伯玉は衛の賢人なり。夜なればとて禮をば廢せじ」といひけり。靈公、人を遣して見しめけるに、果して伯玉にてぞありける。

「人知るまじとて欺くは妄なり」

四知

後漢の楊震の言。

人知るまじとて欺くは妄なり。四知といひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る、いかでか掩ひかくすべき。たとへば一升の米、日々に二三十粒を取らんと、措かんと、知れざるべし。然れども久しく措く



時は増し、取る時は減る。草木も朝見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬやうなれども、誠といふものは少しも間斷なきゆゑに、いつ太るともなけれども、次第に太るものなり。

人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。深き谷の蘭も遙なる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、美しく照ればこそ、人到りたる時も香清く色麗しけれ。人の到るを待ちて香を放ち、色を出さんとせば、筈はずにあふことあるべからず。常々心に掛けて掃灑はきすきしたらん座席と、俄に蜘蛛の絲取り、柱拭きたらんとは、いかでか見紛ふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨

筈にあふ

誠の俄掃除

如レ見ニ其肺肝一

人ノ已ラ見ルコト其ノ肺肝ヲ見ルガ如ク然リ。(大學)

古人の歌

後撰集卷十一にある  
讀人知らずの歌。

ありぬべし

梅園叢書

三卷、梅園の教訓書  
三浦梅園、儒者、名  
は管、豊後國の人、  
安政元年(三五四)歿、  
年六十七。

み偽り文カキらんは、誠の俄掃除なるべし。「如レ見ル其肺肝コト」とて、人をあざむくにあらず、たゞ我が心をあざむくに過ぎざるなり。

古人の歌に曰く、

なき名ぞと人には言ひてありぬべし

心の問はばいかゝこたへん

(梅園叢書)



卷末地圖参照

高山樗牛

名は林次郎、山形縣の人、文學博士、文藝批評家、明治三十五年歿、年三十二

一八 我が袖の記

高山 樗牛

熱海の冬

(なりし  
なりき  
名にし負ふ  
こちふく風  
ときめく  
苦屋  
かをり  
のどかなりや

熱海のふた月は、まことに楽しきあはれ深き冬の暮ら  
しなりし。よそならば吹雪にとぢられて、日影も薄き冬  
の眞中も、名にし負ふ暖地なれば、こちふく風も寒からず。  
むつきはじめの梅が香は、はやくも春を告げそめて、野邊  
のやけあとの緑なすは、人の心もときめくころか。苦屋  
どもに岩海苔のかをりせるもをかしく、蘆の屋に心細く  
立ちのぼる煙ものどかなりや。  
海原遠く見渡せば、相模・安房の山々、雲か霞のすがたお

大島

相模灣の南、伊豆諸島の一

沖の小島

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や、沖の小島に波のよる見ゆ。源實朝(金槐集)

初島

熱海の東南海上三里

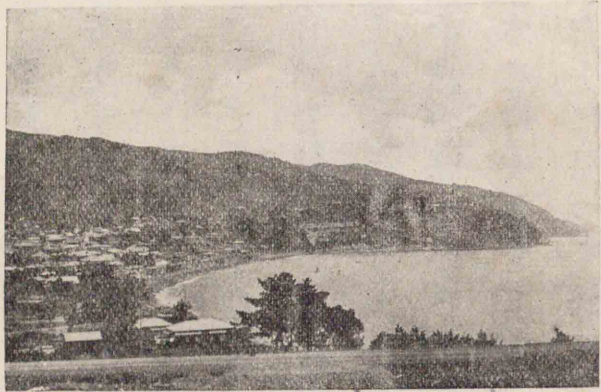
魚見が崎

熱海町の南端の岬。

日金・十國

伊豆國田方郡にある山。

天空海潤



海

熱

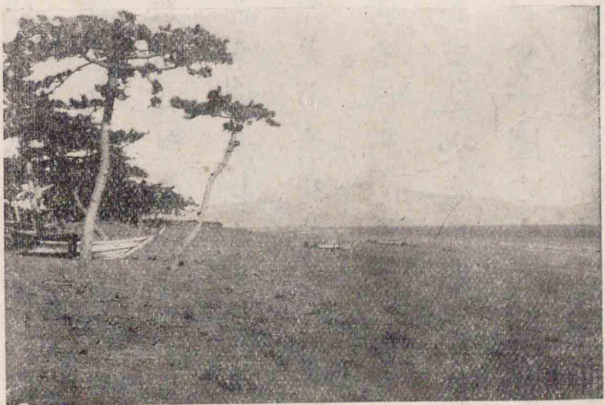
もしろく、大島が根に立つ煙の春風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし、初島わたり漕ぐふなうたの、寄る浪ごとに聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこなたより、渚をつたうて、砂白く松青きほとり、濱千鳥のむれ飛ぶさまもいとをかし。後ろには日金・十國の山々を負ひ、前には天空海潤の間に、一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかくに及び難し。



三保の松原  
駿河灣に斗出した一  
條の砂洲。

三保の春

松風遠く吹き合はせて、波の音もかすかなる、物思ひまさる夕な  
りき。我ひとり清見が關の宿を  
立出でて、三保の松原に遊ぶ。入  
日の影は雲にのみ残りて、月未だ  
上らず。田子の浦・曲の夕なぎに、  
千鳥の聲もいと稀なり。江尻清  
水をはや過ぎて、龍華寺の輪塔を  
右手に見つ。袂に寒き山嵐に、入  
相の鐘を吹き送りて、初春のあは



三保の松原

田子の浦  
富士川口の海岸。  
江尻  
清水港の西岸。  
清水  
江尻町と相望む天然  
の良港。  
龍華寺  
駿河國阿倍郡不二見  
村にある日蓮宗の寺。

清見潟  
今興津町の南、清水  
港の古名。

残んの雪

ゆかり  
石ぶみ

れ一入深くや。三保に辿り著ける頃は、月漸く上り、清見  
潟の水煙は關路遙に立ちこめて、富士の高嶺に雪の色白  
し。見渡せば一帯の松林、木ぶかくも生ひ茂れるかな。  
木立の篩へる月の明りに、残んの雪の色冴えて、杜の下道  
杳なる、霞に落つる影もなし。波の音漸く近くして、我は  
羽衣の松に添うて立ちぬ。羽衣の松は、わが年久しく思  
ひこがれしものなりき。よしさらば、今宵は月と共に立  
ちあかさなかな。松は早く枯れて、幹の朽ちたるが残れ  
り。そのもとにゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光  
おぼろにして見えわかず。あはれ、波の音と松風とのみ  
ぞ、今も昔にかはらざりける。

(釋牛全集)



相馬御風  
名は昌治、新潟縣の  
人、明治十六年生、  
小説家。

一九北國春信

相馬御風

私達は此の冬ぐらゐ冬の怖ろしさを感じたことは嘗てありませんでした。正月の殆ど半は一日として止むことなしに雪が降り續きました。家々は全く雪の中に埋められてしまひました。家のなかは硝子戸のある狭い「明り取り」から射す仄かな雪明の外は、全く晝夜の別なき闇が閉ぢこめておました。平地に積もつた雪の深さは一丈程でしたが、その上へ屋根から卸した雪が積み重なりましたからたまりません。一時は全く穴居同様の有様で、外へ出ますには門口から二丈餘もある高い雪の

卸(り)

山へ登らなくてはならぬ譯でした。それでも妙なものでして、どんなに深い雪の上でも、踏みかため踏みかためされますと、いつしか堅い立派な道がつかまりました。お互に自分よりも先に歩いた人の足跡を追うて歩くやうにしてさへ行けば、自分も雪の中へ埋まらずに行けますと、同時に、それが又いつとなしに堅い立派な道を固めることになるのです。雪道に限つて、自分だけ別の道を歩くといふことは何よりの禁物です。

先ゆきし人の足あと消えてなき

白雪の上をひとりわが行く

時にはかうした壯快な氣持で歩くやうなこともないで



はありませんでしたが、しかしそれは道筋の明らかにならなかつてゐる場合のこととして、多くの場合それはたまたまなく心細い、そして危いことでした。

深い雪の上を歩きますには、私達は多くの場合、藁の深沓を穿きました。此の藁の深沓を、私達は「スンブク」と呼びならはしてゐます。更にその「スンブク」に「カンジキ」と言ふ直徑一尺ほどの丸竹の輪に、井字形に藁繩を張つたものを結びつけて歩くこともありました。私は毎朝學校へ通ふ子供たちのために、門口から街道までの間の道を踏み出しました。朝ごとに一尺以上の新しい雪が、昨日つけた道の上に積もつてゐました。

わら沓をはきたる足に踏む雪の

鳴る音も今はしたしくぞある

こんな歌を以前よみました。が、全く藁沓を穿いた足で、力強く踏みつける度に「ギュ〜」と雪の鳴る音は、一種快い感じを與へるものです。

やがて形ばかりの道筋が出来ますと、子供たちはころがるやうにして、吹雪の中を出て行きます。

子等あまた呼びかはしつゝ雪道

おくれさきだち學校へ行く

吹きつゝの嵐の中を出て行きし

子らがちひさき雪の足あと

「雪深い路を歩む情  
趣」

ちひさし



これも皆舊作ですが、かうしてながい冬の間を毎日子供たちを學校へと出してやるのは、毎年のことではありながら、いつも新たないとしさを感じないでは居られぬことでした。併し、深い雪に降り埋められた生活のわびしさを、最も身にしみくと感じますのは、何と云つても夜でした。夜になりますと、雪がどん／＼積もつて道が絶えると、踏み出す氣にもなれませんが、随つてそれを踏み分けてまで訪ねて来る程の人もめつたにはありません。また、深い雪の中では外界の物音は何一つ聞えません。荒れ狂ふ吹雪の音さへ聞えないものです。たゞ、さうした寂然とした沈黙の底に、微に凄い響を立てて居

「雪の夜のわびしさ」

先月  
大正十年二月  
親不知  
新潟縣西頸城郡市振  
外波兩村間の海岸、  
北陸線中の難所

るのは波の音だけです。思へば、かうした静寂な天地の一隅の薄暗い電燈の下に、炬燵に親子五人が毎晩のやうに頭を寄せ合つて、わびしく暮らして来た冬籠の期間は、随分と永かつたやうな氣がいたします。

しかも、今年の冬は何と言ふ惨ましい凶事の多かつた冬だつたでせう。あなたも新聞紙上で御承知のことと思ひますが、先月三日の夜、親不知で一時に九十人もの人達が雪崩れの爲に惨死しました事件の如きは、就中、私達の心に時ならぬ打撃を與へた大事件でした。此の事につきましては、私はお話したい澤山の惨ましい話や、悲しい話や、美しい話を持つて居りますが、あまりに其の當時



の光景の印象が惨まし過ぎましたので、當分のうちは、私にはとてもそれを口にしたり筆にしたりする氣にはなれないのです。何しろ、壁のやうに突つ立つた山の四百尺も高い山腹から、深さ二三丈もあり、廣さ一千坪ほどもある大雪山崩が、二百人近くの人が、ごちやくくと固まつて乗つてゐた列車の上へ落ちて來て、何もかもめぢやめぢやに打潰してしまつたのですから、其の結果は申す迄もなく、悽慘を極めた有様だつたのです。しかも、それは雲を含んだ怖ろしい西北風の吹きすさむ眞暗な夜の出來事だつたのです。私は今自分で何事をもお話する氣持になれません。

「大雪山崩」

雪！ 雪！ それほど怖ろしい殘虐な災害をすらも醸し出した雪！ 全く一時はどうなることだらうかと言ふやうな不安に、私達が朝夕襲はれてゐた雪！ 如何なる人間の力を以てしても、鐵道の開通すら一時は全く不可能であつたほどの雪！ それがどうでせう。今では、その消え方の不思議さに、私達を驚かしてゐるではありませんか。見渡す限りの地面に、一丈も二丈もの深さを以て積もつてゐた雪が、家一軒流す程の洪水にもならず、全くいつの間にかすつかり消えてしまつたのです。降り積もる時には、誰一人としてそれを氣にかけない者のなかつた雪が、消える時には、誰一人どうしてそれが無



くなつたか解る人がないほどに、いつの間にかこつそりと消えてしまつたのです。そして久しぶりに露れた大地には、到るところに若草の柔らかな芽が、いさゝかの傷も受けずに嬉しさうな頭をのぞかせてゐるのです。無論親不知のあの惨事のあつた場所でも、他の場所と同じやうに、憐れな人間の血に染まつた雪崩の消えて無くなつた跡に、去年と同じくさまゝの若草が柔らかな芽を出すでせう。かうしてまた今年も春がやつて來るのです。

さうです。何と言つても春はもうすぐそこに來てゐるのです。そして冬の怖ろしさがひどかつただけそれだけ、人々はいつもの年より一層もどかしい思ひで、それを待ち焦れて居るのです。けれども、愈春が來、夏が來ますと、人々はまたいつもの年と同じやうに、いつとなしに冬の苦しさを怖ろしさを忘れてしまひます。そして又新たな氣持で次の冬を迎へます。かうして北國に住む人は永い一生を安んじて同じ土地に生活し續けてゐるのです。

「雪の少い正月は何となく淋しい。」時にはこんな歎聲をさへも發する年がある程に、彼等の多くは寧ろ雪に親しみを持つてゐるのです。何と云ふ不思議な自然の攝理でせう。

「雪に親しみを持つ」

自然の攝理

よそよそ



御無沙汰のおわびのつもりで、何かと埒もないことをながくと書きつらねて、又しても失禮を重ねました。どうぞお許し下さい。

あなたの方はもうすつかり春でせう。桃や菜の花の咲きますのも数日のうちでせうと、羨ましく思ひます。こちらはまだ早咲の梅さへも蕾の皮を破りません。北日本アルプスの連山をはじめ、南の方一帯を立圍んでゐる高い山々は申すまでもなく、つい手近い小山まで依然として深い雪に包まれてゐます。それでも三日に一度くらゐ青い空と日の光と、眞白な山々の姿を見ることが出来るやうになりました。ただけでも、ありがたい氣が致し

北日本アルプス  
飛騨山脈をいふ、白馬・大連華・鎗ヶ岳等の高峰相連る。木曾山脈・赤石山脈を南日本アルプスといふに對しての稱呼。

「春を迎ふる楽しみ」

摺筆

ます。海も三月に入つたから時折風ぐやうになりました。漁師たちは喜んでゐます。凧いだ海の果に、眞白な能登の岬と佐渡の山とが時折見える日さへあります。雪解の水の流れ注ぐ川口には、幾百といふ鷗の群が集まつて餌を漁つてゐます。砂濱も日中は陽炎が立ちのぼります。去年の秋、友人に貰つて來ましたチャボが、もう卵を生むやうになりましたのも、此の春の小さな楽しみの一つです。

では、これで筆を擱かせて頂きます。近いうちに又何かと申し上げます。切に皆様の御健祥を祈ります。

(愚庵和尚その他)



二〇 覺めたる芽

河井 醉茗

春は一切の生命が、  
生まれ變る時だ。  
變るなら、  
何もかも思ひきつて變つてしまへ。  
私も變らずにゐられない、  
黙だまつて居られない。

おちついてゐられない。  
底から覺めてきて、  
土の中が自由になると、  
上へ出てみたい。  
出よう、出よう、  
きれいにしよう、  
私が頭をもたげたら、  
空はそれだけ高くなるであらう。

(醉茗詩集)



矢島鐘二  
群馬縣の人、明治十  
六年生、前兵庫縣體  
育主事。

戦  
大正十年九月、米國  
フオレストヒルの庭  
球デヴィスカップ戦  
に於ける清水善造と  
米國選手チルデンと  
の試合。

漂うて

清水君  
名は善造、群馬縣の  
人、明治二十四年生、  
三井物産會社員。

映え  
「戦の幕は切つて落  
された」

### 二 競技の精神

矢島 鐘二

戦の幕は切つて落されました。こゝ紐育<sup>ニューヨーク</sup>を距る二十哩、理想的運動場として有名なフオレストヒルの清らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな氣分が漂うてみました。老幼男女を問はず、世界各國の人が、鯨詰のやうに、ひし〜とグラウンドの周圍に寄せ重なつて、この展開された場面に、兩選手の出場するのを待ち構へてみました。チルデン君の上に幸福あれと祈る人の心と、清水君の上に光榮あれと祈る人の心とが、平和な光の中に照り映えてみました。

凜乎

苦衷  
衷(衣)

異口同音

囁く

火蓋を切る  
龍虎の争

互え

この光の中に、この無聲の應援の中に、凜乎たる決意と、慘憺たる苦衷とを想はせながら、二君は微笑を浮べて、テニスコートに現れました。チルデン君は身長六尺二寸、清水君は五尺四寸五分ですから、まるで大人に子供が立合つたやうでありました。観覽席で、異口同音に「氣の毒だが、清水君は駄目だらう。」と、囁くのが、清水君の耳に聞えました。

火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く龍虎の争が始まりました。秒一秒、チルデン君と清水君との球は共に互えて來ました。観覽者は、その球の動くまゝに、碧の瞳を忙しさうに動かしてみました。その瞳に、傷はしや



亡(國)宇  
驚倒  
躍起

片足踏み亡らしたチルデン君の取亂した姿が映りました。米國人は驚倒しました、躍起となりました。この時でした、清水君は、チルデン君の血走つた目先に、取亂した足許に、柔らかい程のよい球を送つてやりました。この瞬間に於ける清水君は、名譽の感情も、自尊の意氣も、全くその念頭に持つてはるませんでした。「ミスターシミツ！」といふ歡呼の聲と共に米國人三萬の手が、林のやうに一齊に振り上げられました。あゝ、この一事、清水君も清水君ですが、米國人も米國人であると思ひました。

眉宇  
蔑(輕)

初めコートに出た時、チルデン君の眉宇の間には、清水君に對する侮蔑の情があり、と浮んでゐましたので、

情誼  
最負  
推獎

心ある米國人は、少からず不安の念を懐いてゐたやうでありました。ところが、清水君は、出場早々、この冷たい侮蔑に報いるのに、溫情春のやうな球を以てしたのでありますから、その深切は電氣のやうに米國人の胸にも響いて、感謝感激が心の底から湧き上つたことでありませう。英國人などは清水君が永らく印度に在職してゐた關係もあり、日英同盟の情誼もあり、日本の應援者の少い關係も手傳つたからではありませうが、すつかり清水最負になつて、盛に君を推獎して歡呼しました。當時紐育には群馬縣人が五十五人ゐましたが、謂はゆる上州長脇差の氣象から、この日は總動員で應援に参加して、盛に歡呼し



ました。この敵味方總掛りの歡呼は、清水君の單なる妙技に對して發したのではなくして、その精神に對する力強い感激から發動したのであります。時は一點一分を争ふ時でありました。五月・六月・七月・八月の四箇月に互り、十二箇國の選手を薙ぎ倒して、最後の決勝に入つた時でありました。若し今明二日間の米國選手との競技に於て勝を制したなら、日本開闢かひびやく以來のデヴィスカップを獲得することの出来る時でありました。この時に於て、チルデン君の心中を察して、同情のある球を送つた清水君は實に偉いと思ひます。特に清水君が、謂はゆる「汝は汝にして汝にあらず。」で、日本を背負つて立つてゐる事

勝を制す  
開闢

釋迦  
中印度、カピラ王國の淨飯王の子、佛教の祖、(西曆前元)入滅、年八十。

孔子  
名は丘、字は仲尼、支那魯の人、儒教の祖、周の敬王四十一年(西曆前四七九年)卒、年七十三。

無援孤立

精華

理の當然  
情の自然

を自覺して執つた態度は、實に敬服する外はありません。人格の修養といつて、いきなり釋迦や孔子の眞似をしようと思つても、なか／＼困難であります。私共に取つて最も手近な修養法は、互に深切を盡くしあひ同情をしあふこととあります。金錢を粗末に遣へば、貧乏になつて生活に困り、身體を粗末にすれば、病氣になつて苦しみます。深切同情の心を疎にすれば、終には無援孤立の窮境に陥ります。我が清水善造君のこの運動道德の精神、貴く美しい球の精華は、蓋し不朽の光輝のあるものと信じます。

(スポーツマ  
ンの精神)



三反 省

反 省

人を知るは至りて難けれど、己を知るは人を知るより尚難しと言へり。故に古人も「知人謂之知、自知謂之明」と言へり。明は知より勝れり。人の心は隠れて表より見えず。故に知り難きは宜なり。我が心は内に在りて、自ら知り易かるべくして、反つて知り難きは何ぞや。我が身には私ありて、己をひいきしてゆるす故に、悪しき事も善しと思ふなり。「人莫知其子之惡」と古語に言へるが如し。明鏡もその裏を照らさず。我に知ありと思へ

片つ方

ど、片つ方に暗き所ありて、過悪あるをも知らざる事あるべし。能く省み、また人の諫を聴き、我が過と悪とを知りて改むべし。古人も「人誰無過、過而能改、善莫大焉」とも、「過則勿憚改」とも、また「過而不改、是謂過矣」とも言へり。我を知らざるは愚かなりと言ふべし。外事をさし措きて、先づ我が悪しき事を早く知りて改むべし。人に不善ありとも、怒りて強く悪み責むべからず。我が不善を知らば、強く責め治むべし。強く人を責めざれば人の恨なし。我が不善を強く責むれば、我が身に益あり。己をゆるして人を責むるは、大いなる僻事なり。人の恨ありて、我が身に益なし。

僻事  
初學訓  
五卷、貝原益軒の教訓書



猶豫

思慮と決斷

思慮して善惡をよく明らめたらば、必ず決斷して、猶豫なく行ふべし。思慮して理明らかになりても、決斷強からざれば行はれず。悠々として空しく時を過ごすは悪し。所謂「見義而不爲無勇也。」思慮と決斷との二つは備はらざるべからず。思慮なくして妄に早く決斷すれば誤る。これ不智なり。思慮して道理はわかりぬれど、悠悠として時を失ふは怠なり。これ「無勇也。」二つの者何れも悔あり。

(大和俗訓)

大和俗訓  
八卷、貝原益軒の教訓書。  
貝原益軒一名は篤信筑前の人、江戸時代の儒者、正徳三年(三七)歿、年八十五。

三仁に返れ

徳富蘇峰

徳富蘇峰  
名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年生、評論家、歴史家。

囊括

「自明の理」

釘を板上に載せたればとて、そのまゝになし置くときは、何時まで経ともそのまゝなるべし。釘は釘なり、板は板なり。たゞ之を金鎚にて打ち込むとき、釘は板に入りて、始めて其の効用をなすなり。これしきの理窟は、三歳の小兒も解することなれども、三十歳の壯夫にして、なほこれを會得せざるが如きものあるは何ぞや。

水到れば渠成り、莢披けば豆落つとは、自然の作用を囊括したる要語なり。されど世の中は、たゞ自然の作用にのみ一任し、人間は自然の傍觀者たるを以て満足すべし



となすが如きは、以ての外の妄想なり。かゝる妄想は畢竟怠惰漢の天堂にあらざれば、横着者の極樂たるのみ。吾人は固より自然界の作用を計上せざるべからず。然も水卑きに就くを原則とすれども、之を卑きに導くには、多少の人力を要せざらんや。豆は熟して落つれども、其の收穫には又人力を加へざるべからず。自然を相手とする仕事すらかくの如し、況や人事に於てをや。若し、徒に周囲の事情のみを顧慮して、自ら發作する所なくんば、人は唯路傍に倒れたる枯木と一般ならんのみ。人の智愚相距る遠からず。彼の思案する所は、概ね我の思案する所なり。其の相違の因りて生ずる所以は、一

「自ら發動せよ」

は之を實行し、他は之を實行せざるにあり。否、一步を進めて觀察すれば、一は之を實行すれども透徹せしむべき努力を加へず、他は之を加ふるの相違による。言ひ換ふれば、金鎚を振り上げて打ち込むと打ち込まざるとの相違による。太閤記を讀む者は、天王山が如何に羽柴明智兩軍の争地たりしかを知らん。其の形勝の地たるを知るに於ては、光秀も秀吉も異なる所なし。たゞ秀吉の打ち込む力が、光秀に勝りたるのみ。凡そ世の中に競争あるは、双方の力相匹敵すればなり。而して勝敗の分るゝは、相匹敵するに拘らず、打ち込む力の差等による事多し。要するに同様の力ならば、十回叩く者よりも、二十回叩く

太閤記  
太閤軍記、四卷、小  
瀬道喜の著  
天王山  
山城國乙訓郡、天正  
十年(三四三)秀吉光秀  
と戦ふ。



箇中の消息

「實行透徹の力」

者を以て優れりとせざるを得ず。二十回よりも三十回を優れりとせざるを得ず。箇中の消息は「水到れば渠成る。」を夢みて、晝寢を貪る怠惰漢の能く理解する所に非ず。

諺に「糠に釘」と言へり。これ相手が放漫にして釘止まりなきを意味す。されど世事を概観すれば、糠に釘にあらずして石に釘の趣なき能はず。故に、自ら努めて既に入る三寸と思ふものが、却て依然表面に印したるのみにして、入りたるにあらず、かへりて折れたるに過ぎざることあり。人間は總てに自惚おぼあねども、自己の努力に對しては、殊に最も甚しとす。されば、果して打ち込み得た

トす

りや否やは、單に釘の表面に露出したる長短を以てトすべからず。宜しく其の中心に透徹したる深淺に就いて、之を測定せざるべからず。打ち込む力の輕重は勿論なれども、相手の品質は最も吟味に値するものあり。即ち糠を相手とすると、板を相手とすると、石を相手とすると、は自から差別なき能はず。

吾人は我が意志の他に徹底すべくして徹底せざるを見て、「糠に釘」てふ諺を反覆することあり。或はさることもある。されど多くの場合に於ては、糠と思ひしは石にして、鐵釘と思ひしは、却て竹釘たりし事なきにあらず。古人は「人を愛して親しまずんば、其の仁に反れ」と言へり。

「糠に釘」てふ



「自己の打ち込む力に反れ」

吾人は言はんとす、人に命令して其の命令の行はれざることあらば、それは自己の打ち込む努力の不足に反らざるべからずと。これ寧ろ他を咎むるよりも、自ら咎むべきを正當となすなり。然りと雖も、吾人の所説は、相手を構はず何物にも打ち込むべしと言ふにあらず。苟くも打ち込まんとするには、果して其の必要あるか、果して其の見込あるか、果して其の確信あるかを商量せざるべからず。出来ぬ事と知りつゝ之を行ふは、愚にあらざれば狂なり。中途にして廢棄する程ならば、固より當初より企てざるに若かず。然も一旦打ち込むべしと決斷したる以上は、腕と相手との決闘なり。板にもあれ、石にもあれ、

商量

一氣呵成  
「打ち込む力に確信ありや」

鐵にもあれ、之を打ち、之を叩き、腕が折るとも、金鎚碎くとも、之を打ち込まざるべからず。而して既に寸餘を打ち込まば、其の餘勢は、一氣呵成に透徹せずんば止まず。これ所謂自然の勢ひなり。自然の作用は、たとゝ打ち込む努力をなす者にして始めて之を利用するを得るなり。

己に克ち禮に復るを仁と爲す。

孔子

仁を以て人を安んじ、義を以て我を正す。

春秋繁露



下村海南  
名は宏、和歌山縣の  
人、法學博士、東京  
朝日新聞社重役、明  
治八年生。  
立ちてし  
狂介  
山縣有朋の幼名。  
俊介  
伊藤博文の幼名。



久坂玄瑞  
長州藩士、幕末の勤  
王家、元治元年(三五三)  
歿、年二十六。  
高杉晋作  
名は春風、山口藩の  
志士、慶應三年(三五七)  
歿、年二十九。  
木戸孝允  
明治維新三傑の一人、  
明治十年歿、年四十  
四。

山縣有朋  
元帥、陸軍大將、公  
爵、大正十一年歿、  
年八十四。

左傳  
孔子の修めた史書  
「春秋」の註釋で、正  
しくは「春秋左氏傳」  
八家  
唐宋八家、韓愈・柳  
宗元(以上唐代)歐陽  
修・蘇洵・蘇軾・蘇轍・  
曾鞏・王安石(以上宋  
代)の八大家の文章。  
安積良齋  
岩代國の人、漢學者、  
萬延元年(三五〇)歿、  
年七十六。  
佐久間象山  
信濃國の人、幕末志  
士、元治元年(三五三)  
歿、年五十四。  
杉家  
松陰の實家、當時は  
松陰の長兄民治が家  
長であつた。

### 二四 松下村塾を訪ふ

下村海南

さゝやけきこの家の前にまこと我立ちてし、い  
だくつゝましきおもひ  
や狂介、お俊介とまき垣のこのかげにして手を  
握りしか

阿武川の中洲になつてゐる萩の街、そこに久坂玄瑞、高  
杉晋作、木戸孝允、山縣有朋などの舊宅が點在してゐる。  
東萩に渡れば、東の方、毛利家累代の菩提所、四大夫、十二  
烈士の墓處とある東光寺を背にして松陰神社、松下村塾、  
松陰幽居の家などが一廓をなしてゐる。

社前には、松陰先生の臺柄と稱せられる米つき臺が保  
存せられてゐる。安政五年六月二十八日、先生村塾から  
在京の久坂義助に贈つた書中に、  
隔日左傳八家會讀、勿論塾中常居七つ過會讀終る、そ  
れより畑又は米春與、在塾生同之、米春大得其妙、大抵  
兩三人同じく上り會讀しながら春之、史記など二十  
四五葉讀む間に、米精げをはるまた一快なり。  
とある。松陰先生は二十三歳で安積良齋、佐久間象山に  
從うて學び、ついで安政元年二十四歳の時、伊豆下田に米  
艦搭乗を計り、事破れて江戸の獄に下り、ついで萩の野山  
獄にうつされ、後免されて杉家に幽せられた。幽囚中、家



學山鹿流兵學教授のため門人の引見を許され、松下村塾を開いた。



吉 田 松 陰

兵學研究に名を借りて來りて學ぶ者が多く、八疊敷の小舎では狹隘なので、門人等鋸をとり、鏝を手にし、土石を運び、地をならし、壁を塗り、家根をふき、十疊半の一室を建増したといふ。その村塾の前に倉庫がある。先生刻苦精勵、寸陰を惜しみ、行住坐臥、講話抄録を絶たず、倉庫納むるところ殆ど擧げて皆書冊である。

狹隘

行住坐臥

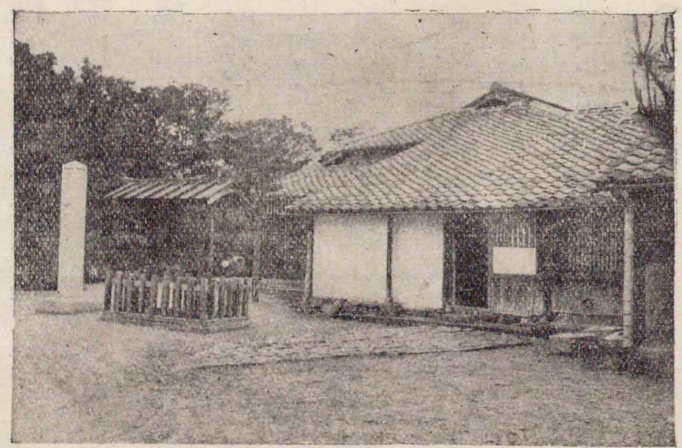
間部詮勝  
越前鯖江の城主の老  
中、明治十七年歿、  
年八十三。

先生の著書は幽囚録・回顧録・幽室文稿・二十一回叢書をはじめ、二十九歳で果てられた生前の作品、實に百二十餘冊に上つてゐる。

先生、老中間部詮勝要撃の事に坐し、安政五年十二月投獄の命下り、翌六年七月江戸の獄にあり、死罪に斷ぜられた。

親を思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何と聞くらん



松 下 村 塾



たとひ……とも

は十月二十日認めたる永訣の書に記されたる歌であり、  
身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも  
とゞめ置かましやまと魂

は獄死の前二日、十月廿五日留魂録に記されたる辭世の

吉田松陰筆

留魂録

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留置まし大和魂  
十月念五日  
二十一回猛士

留魂録

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留置まし大和魂  
十月念五日  
二十一回猛士

吉田松陰筆

歌である。その留魂録四つ折のちり紙が六七枚、ガラス戸を隔ててよく見えない。今日は何とかいふ人がゐないといふので、ガラス戸はどうしても開けてくれぬ。

立去りかねるガラス戸の内、留魂録とならんだ先生の抄録の中に、松葉に木の子を添へた繪に、

前原一誠

長州の藩士、萩の亂の首領、明治十年歿、野村靖

山口藩士、子爵、明治四十二年歿、年六十八

品川彌二郎  
山口藩士、子爵、明治三十三年歿、年五十八

山田顯義  
山口藩士、陸軍中將、伯爵、明治二十五年歿、年四十五

伊藤博文  
長門の人、明治の大政治家、公爵、明治四十二年歿、年四十九

明倫館  
山口藩の藩學。

奇兵隊  
長州藩士高杉晋作の組織した兵士の一隊

折衝

名月に香は珍らしき木の子かな

と題したのが見える。先生が漢詩と短歌の外に、かうした俳味にも恵まれてゐた事はいかにもうれしい。十八疊の松下村塾は、安政三年七月から五年十二月の入獄まで、わづか二年間しか開かれなかつたが、維新回天の大業を仕上げた志士、高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允、前原一誠、野村靖、品川彌二郎、山田顯義、山縣有朋、伊藤博文などは皆この村塾から輩出した。

先生のあとに残り、明倫館舎長となり、奇兵隊長となり、内は俗論黨と戦ひ、外は隣藩幕府、外國を相手に、砲彈と言論とにより折衝した門下生高杉晋作も、先生と同じ二十



低徊

九歳で果てた。昔ながらのまき垣に添ひ、柿の木のもとをめぐり、村塾と幽囚の室のあたりを低徊してゐると、空に聲がある。

「お前はもう何歳になる。」

「僕はもう五十二歳、あと六歳で先生の壽命の倍になる」  
「いや人間の働くのは二十歳を越してからぢや。松陰先生は正味九年働いて亡くなられた。お前などは五十二から二十さしひいて三十二年、四倍近い歳月を過ごしてきたのだ……たゞむだにな。」  
空の聲がつゞく、

「維新の志士は國禁をくゞりくゞ不完全極まる學問を

なし、三十歳ならずして亡くなられたが、あれだけの仕事をした。今の連中は大手振つて完全な學問を修めてゐるやうだが、仕事は出來ずに、たゞ年だけ食つてゆくやうだ。」

所か、時か、人か。

明倫館のあとに建てられた小學校からは、完全な教育を受けつゝある男の子、女の子が今三々五々家路を指して歸つて行く。

(東京朝日新聞)



芳賀矢一  
福井市の人、慶應三  
年(五三)生、國學者  
文學博士、前國學院  
大學長、昭和二年歿  
年六十二。

### 二五 皇室と國民

芳賀 矢 一

我が國は開闢以來君臣の分がさだまつて居るといふことは、歴史上の事實の説明を待たずして、有史以前から我が民族の腦裏に沁み渡つた思想である。

試みに神話を見よ。八百萬の神はあつたが、我が天孫にむかつて敵對行動を取つたものは無い。いづれもおとなしい忠義な神で、天つ神も國つ神も、日神の御子孫の事業を輔翼する事をのみ力めて居る。その事業を妨害したり、又はその國土を奪ひ取らうなどとするものは、一人も無い。誠に平和な神話である。此の神話は、我が太

古の國民の心性を反映したものでないか。

この太古の國民の精神には、あきらかに君臣の分がさだまつて居る。天孫の御血統が即ち帝位を繼ぐべき種で、其餘の者は、皆此の國土に居て、その下に服従すべき種とさだまつて居る。皇室は一種別なものである。私等國民よりは一段高いものである。これは「カミ」である。長上である。神である。柿本人麻呂が「大君は神にしませば」と歌つたのも、「カミ即ち神」といふ上代思想を言ひ表はしたのである。帝國憲法第三條に「天皇は神聖にして侵すべからず」とあるは、よく太古以來の國民の心を表はしたものである。

大君は云々  
大君は神にしませば  
天雲の、雷の上にい  
ほりせるかも(萬葉  
集)



敬虔

皇室に對して敬虔の念を有することは、このとほりであるが、たゞ神として恐れ畏むばかりではない。皇室の事を「オホヤケ」といふのは、大家の義である。皇室に對しては、私達は小家である、即ち皇室は私等の本家宗家であるといふ考があつた。この思想の中には、皇室と國民との間に、多くの親愛の意味がこもつて居る。統治者と被治者といふ關係ではなくして、心の底から上下互に親睦して居る趣がある。八百萬の神は、皇孫の事業を翼賛する方々ばかりであるが、義理づくに服從して恐れて居るのではない。大本家の統領として、尊敬して居るのである。兩者は、親子的關係で結合して居たのである。子と

しては、親の命令を聽かねばならぬ。親の心を喜ばせねばならぬ。親からは何を與へられてもうれしい。親子の愛情は人の至情で、これが「マゴコロ」である。この「マゴコロ」が即ち忠である。忠といふ語は漢字の音であるが、日本語に譯すれば「マゴコロ」とするより外にあるまい。日本では忠も孝も同じ事で、どちらも同じく「マゴコロ」である。

この「マゴコロ」を以て皇室に對するのが、國民の情である。神のやうに尊んで、神のやうに畏れ、親のやうに頼みにして、親のやうにありがたく思ふ。それゆゑ、天皇の命とあれば、どんな事でも服從する、どんな事でもいひつけ



を聽く。いや／＼するのではない。有難がつてするのである。身命も喜んで差し出すのである。

この「マゴコロ」即ち皇室に對する神の觀念が、武家時代に至つては、轉じて主従の關係の連鎖となつた。是が即ち武士道の精髓となつたのである。自分の事へる主君には「マゴコロ」をつくす、即ち忠をつくして身命を惜しまず、事ある時は馬前に討死するのが、家來たる者の心掛となつた。

武士道は士の守るものであつたが、この精神はいつしか武士といはず、町人といはず、男といはず、女といはず、一般國民の間に擴がつてしまつた。「奉公」といふことは、元

來朝廷だけに對する事であつたが、通常の雇人にも「奉公人」といふ語を用ふる様になつた。其の本をたゞせば、君臣の關係が主従の關係にうつされた結果である。併し、主従といつても、其の關係は、どうしても君臣の關係程にはないのである。もと／＼君臣の關係を、主従に借りてうつしたのであるから、従は主を、國民一般が皇室に對する様に、全く別人種とは考へない、神と同一には考へない。權力なり、恩義なりの爲に服従するとの考は失せなかつた。

一旦主従の關係にうつされた忠の解釋は、明治の維新とともに、再び昔のとほり、皇室に對するものと限られて



しまつた。否、明治の維新そのものは、その解釋を皇室に限るものとして、徳川幕府を打倒したのであつた。維新後は、士・農・工・商は皆平等になつて、こゝに一般國民が兵役に就くことになつた。陪臣・陪々臣の制度は廢せられて、いづれも天朝直參の臣となつた。久しい間武家で養成した武士道的精神は、今や天朝にむかつてのみ捧げられる事になつた。武士・町人にも行き渡つて、小説・淨瑠璃の平民的文學にも反映して居る從の主に對する犠牲的精神は、今や國家の爲に身命を抛つ愛國の精神となつたのである。

政體幾たびも變り、王室屢更代する外國では、古來の歴

史を思念させ、國家的觀念を養成する必要上、獨逸ではゲルマニア、英國ではブリタニカ、佛國ではガリアといふ空想的人物を拵へて居る。ところが、我が日本では、國土と皇室とは、神代以來已に離るべからざるものであつて、國のため家のためといふ事は、同一の意味と解釋される。「朕は即ち國家なり」とは、我が國の天皇にして始めて宣ふことの出来る詞である。



三訂 新日本讀本卷四(終)

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不	【九】元兄充兆兇	卷卽【一】厄厘厚原厥	夏【夕】夕外多夜夢【大】
世丙並【一】中【一】丸主	先光克兌免兒【入】入內	【去】去參【又】及友反叔	大天太夫央失奇奉奏契
【一】之久乏乘【乙】乙九	全兩【八】八公六共兵具	取受【口】口古句叫召可	奔奢與奪獎奮【女】女奴
乞也乳亂【一】了事【一】	其典兼【一】冊再【一】元	史右司各合吉同名后吏	好如妃妊妥妙妨妹妻姉
二五五井【一】亡交京亭	【一】冬冷涼准凌凍【九】	吐向君吟否舍呈吸吹告	始姑姓委姦姪姪姻姿威
亦【人】人仁仇今介仕他	凡【口】凶出【刀】刀双分	咸周味呼命和咽哀品員	娘娛娘娼婚婦婚媒嫁嫡
付代令以仰仲伴任伊伏	切刊刑列初判別利到制	哲唐唯唱商問啓善喉喜	嫌孃【子】子字存孝季孤
伐休伯伴伺似位低住佐	刷劖刺刻則劖前剛副刺	喪喫單嗣嘉器噴嚴囁	孫學【宅】宅守安宏完宗
何余佛作伸使來佳例侍	割劖劖劖劖【力】力功加	【口】囚四回因困固國圍	官定宜客宜室宮害宴家
供依侮候侵便係促俱俊	劣助努効勅勇勉勸勸務	園圓圖團【土】土在地坂	容宿寄密富寒察寢寢審
俗保俠信修俳佞倅併倉	勝勞募勢勸勸勸勸【力】	均坊坑坪垂型埋城域執	寫寬寶【寸】寸寺封射將
個倍倒候借倫假倅偏倅	包【匕】化北【區】區【十】	培基堀堂堅堤堪報場塔	專尉尊尋對導【小】小少
健側偶傍傑備催働傳債	十千升午半卑卒卓協南	塗塵境墓塀增墨墮壁壇	尙【尤】就【尺】尺尼尾尿
傷傾儻僚僚僞僧價儀億	博【卜】占【印】印危却卵	壓壤【土】土壯壹壽【又】	局居屈屈屋展層履屨



【山】山岡岩岳岸峙峯島  
峽崇崎崩【川】州州巡集  
【工】工左巧巨差【已】已  
【巾】市布帆希帝帥師席  
帳帶常帽幅幕幣【干】干  
平年幸幹【幻】幼幾【床】  
床序底店府度座庫庭庶  
康廉靡廢廣廳【延】延廷  
建廻【弄】弄弊【式】式  
【弓】弓弔引弟弱張強彈  
【影】影彰影彰【役】役  
彼往征待律後徐徑徒得  
從御復徵微德徹【心】心  
必忍忍志忘忙忠快念怒  
思怠急性怨怪怯恐恥恨  
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡惱想愁愉  
意愚愛感慈慙慕慘慢愼  
慣慨慮慰慶慈憂憐憚恚  
憶憾憤懇應懲懷懸戀  
【戔】戔戎戰戲戴【戶】戶  
戶戾房所扇【手】手才打  
扱扶批承技抑投抗折抱  
抵押披抽拂拍拒拓拔拘  
拙招拜括拳拾持指振捕  
捧描捨掃授掌排掛探探  
控推揚接提握握揮揮揮  
援損搖搜摘携摩撫擇擊  
操擔據擬擴攝【支】支  
【支】收改攻放政故敘敘  
敏救敗敢散敬敵數數整  
【文】文【斗】斗料斜【斤】斤

斤斤斬新斷斯【方】方施  
旋族族旗【无】既【日】日  
且旨早旬旭昇昌明易昔  
星春昭昨是映時晚晝普  
景晴晶智暇暖暗暑暮暴  
曆曇曜【日】曲更書曹會  
替最會【月】月有朋服朕  
朗望朝期【木】木未末本  
札朱机朽杉材村束柿杯  
東松板枕林枚果枝枯架  
柄某染柔查樞柱柳栗校  
株根格栽桃案桐桑梅條  
梨棧棄棋棒棟森栢植楠  
業極榮構概樂樓標樞樞模  
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權  
【欠】欠欲款欺歌歎歐歡

【止】止正此步武歲歷歸  
【歹】歹死殊殉殖殘【段】段  
殺殿毀【母】母每毒【比】  
比【毛】毛【氏】氏民【氣】  
氣【水】水水永汁求汗汚  
江池決汽沈浚沖沙汰河  
沸油治沼沿沉泉泊法波  
泣泥注泰泳洋洗津洪活  
派淑浦浪浮浴海浸消涉  
液淑淚淡淨淫深混清淺  
添減淵渡溫測港渴湖湧  
湯源準溢溶溺滅滋滑滯  
滴滿漁漂漆漏演漕濃濕  
漫漸潔滑湖澤激濁濃濕  
濟濱瀧灣【火】火灰災炊  
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】爪  
爪爭爲爵【父】父【爻】兩  
【片】片版牌【牙】牙【牛】牛  
牛牧物牲特犧【犬】犬犯  
狀狂狩狹猛猶獄獨獲  
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉  
王玩珍珠班現球理琴環  
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘  
甚【生】生產甥【用】用  
【田】田由甲申男町界長  
畑畝畝略番畫異雷當疊  
【疋】疋疎疑【疋】疫疲疾  
病症痘痛痢療癬【登】登  
發【白】白百的皆皇【皮】皮  
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡  
監盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢  
知短【石】石砂砲破研硬  
硯碁碎碑確磁磨礎【示】示  
示社祈祕祖祝神稟祭禁  
禍福禦禮【禾】禾秀私秋科  
秒租秩移稅程稚種稱稻  
稿穀積穗穩【穴】穴穴空  
突窈窕窗窳【立】立章童  
端競【竹】竹竿笑笛符第  
筆等筋筒答策算管箱節  
範築篤簡簿籍【米】米粉  
粒粘粗粹精糖糞【糸】系  
紀約紅紋納純紙級紛素  
紡索紫果細紳紹紺終組  
結絕絡給統絲絹經綠維  
綱網綴綻綿緊緒線縹綠

編綏緯練縛縣縫縮縱總  
績繁織繕繪繭線繼續  
【缶】缺【網】罪置署罰罵  
罷羅【羊】羊美羣義【羽】羽  
羽翁習習翼【老】老考者  
【而】耐【乘】耕【耳】耳聖  
聞聯聲職聽【聿】聿聲  
【肉】肉肖肝股肥肩育肺  
胃背胎胞胸胸能脊脈脊  
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜  
膝臍臆膺臍【臣】臣臥臨  
【自】自臭【至】至致臺  
【目】與興舉舊【舌】舌舍  
【舟】舞【舟】舟航般舵舶  
船艦【良】良【色】色【艸】  
芝花芽芳苑苗若苦莢茨

茶草荒荷莊菊茵菓菜華  
萬落葉著莖蒙蒸蕃蔓薄  
藏藝藤藥【虺】虺虺處虛  
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲  
蠶蠶【血】血衆【行】行術  
街衝衝衛【衣】衣表袞袋  
袖袂裁裂裏裕補裝裸製  
複袞襲【西】西要覆【見】  
見規視親覺覽觀【角】角  
解觸【言】言訂計討訓託  
記訟訪設許訴診詐詔評  
詞詠試詩詰語詳誇誌認  
誓誕誘語諾謀說課調談  
請論論諸諾謀詔諍講謝  
謠謹謬證識諍警譯議護  
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆



豐【豕】豚象豪豫【貝】貝  
 貞負財貧貨販貫責貯貳  
 貴買貸費買賀貨賄資賊  
 寶賜賞賢寶賤賦實賴購  
 贈贊【赤】赤【走】走赴起  
 超越趣【足】足距跡路踊  
 躍【身】身【車】車軌軍軒  
 軟軸較載輕輦輪輯輪輿  
 轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰  
 農【走】走迎近返迫迭述  
 迷追退送逃逆透逐途通  
 連造連週連逸連遊連  
 過道達遠遙遞遠遣適遭  
 遲選選遺避還邊邊【邑】  
 邦邪邱郊郡部郵都鄉  
 【酉】酌配酒酢酬酷酸醉  
 醜醫【采】釋【里】里重野  
 量【金】金釜針鈞鈍鈴鉛  
 鉢銀鉢銅銘銳鋒鋼錯錄  
 錢鍋鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑑鏤  
 【長】長【門】門閉開閉問  
 關閱關【鳥】防附降限陞  
 院陣除陪陳陰陵陶陷陸  
 陽隆隊階隔隙際障隣隨  
 險隱【隹】隹雀雄雅集屨  
 雌雙雜離難【雨】雨雪雲  
 零雷電雷震霜霧露靈  
 【青】青靜【非】非【面】面  
 【革】革靴【音】音響【頁】  
 頂項順頓預頑領頭頻題  
 額顏頤頤頤頤頤【風】風  
 【飛】飛翻【食】食飢飲飯  
 飾養餓餘餅館餐【首】首  
 【香】香【馬】馬馳駁駮駐  
 騎騰騷驅驗駭驛【骨】骨  
 髓髓【高】高【髟】髮【門】  
 闕【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮  
 鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄  
 【齒】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥  
 【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸  
 點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】  
 齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】  
 龜

注意

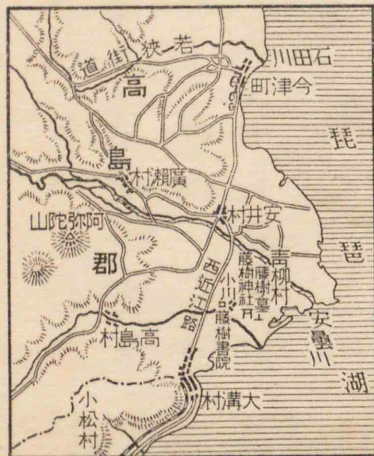
(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、た  
 だし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞  
 および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと

略字表

左の字體を本位として用ひること。  
 (括弧内の小字は字典體)

勸(勸)	權(權)	灌(灌)	歡(歡)	觀(觀)	擧(擧)	譽(譽)	斷(斷)	繼(繼)
沢(澤)	沢(澤)	沢(澤)	沢(澤)	沢(澤)	齒(齒)	齡(齡)	濕(濕)	頭(頭)
変(變)	恋(戀)	蛮(蠻)	湾(灣)	参(參)	窓(窗)	窓(總)	属(屬)	属(屬)
莖(莖)	徑(徑)	經(經)	輕(輕)	爲(爲)	爲(爲)	偽(偽)	帶(帶)	帶(帶)
併(併)	塀(塀)	瓶(瓶)	餅(餅)	研(研)	参(參)	慘(慘)	兩(兩)	滿(滿)
齊(齊)	齋(齋)	濟(濟)	劑(劑)	兇(亂)	兇(發)	廢(廢)	亂(亂)	辭(辭)
残(殘)	淺(淺)	賤(賤)	錢(錢)	志(走)	志(走)	徒(徒)	惱(惱)	惱(惱)
勞(勞)	營(營)	榮(榮)	學(學)	覺(覺)	担(擔)	胆(膽)	担(擔)	胆(膽)
					寿(壽)	壽(壽)	壽(壽)	壽(壽)
					数(數)	数(數)	数(數)	数(數)

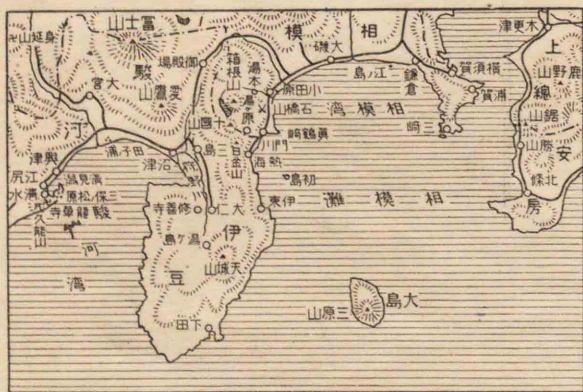




照參(生先樹藤)課五十第



照參(日落の灘) 杉



照參(記の袖が我)課八十第

炉(爐)	柔(條)	写(寫)	凹(圓)	勵(勵)	虫(蟲)	独(獨)	虚(虚)	康(鹿)	竜(龍)	樂(樂)
儀(儀)	樣(樣)	宝(寶)	図(圖)	嘗(嘗)	蚕(蠶)	觸(觸)	戲(戲)	孺(麗)	滝(瀧)	葉(葉)
献(獻)	帰(歸)	扣(控)	壺(壹)	国(國)	仮(假)	昼(晝)	遅(遲)	聴(聽)	随(隨)	読(讀)
画(畫)	気(氣)	叙(叙)	実(實)	圍(圍)	兒(兒)	撰(撰)	解(解)	廳(廳)	髓(髓)	続(續)

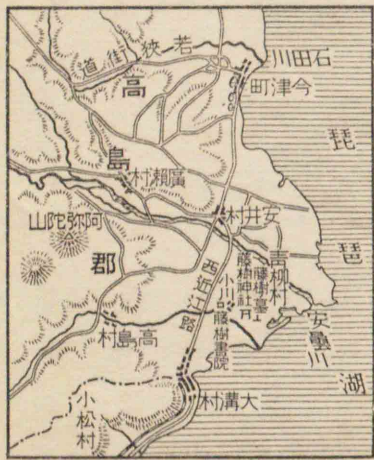
略字表 終

鬪(鬪)	塩(鹽)	靈(靈)	医(醫)	豊(豊)	旧(舊)	糸(絲)	苗(苗)
刺(刻)	点(點)	余(餘)	鉄(鐵)	弁(辯)	万(萬)	欠(缺)	尽(盡)
龟(龜)	覚(覺)	館(館)	関(關)	逶(遞)	号(號)	声(聲)	礼(禮)
		体(體)	双(雙)	辺(邊)	証(證)	台(臺)	称(稱)

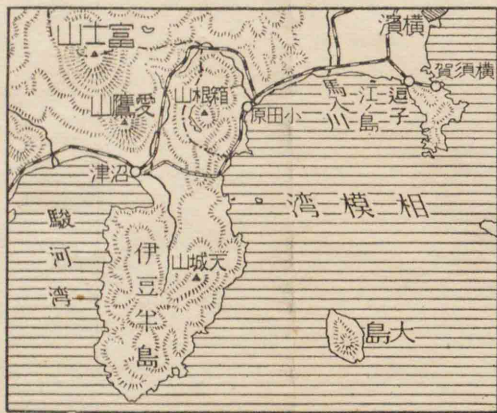




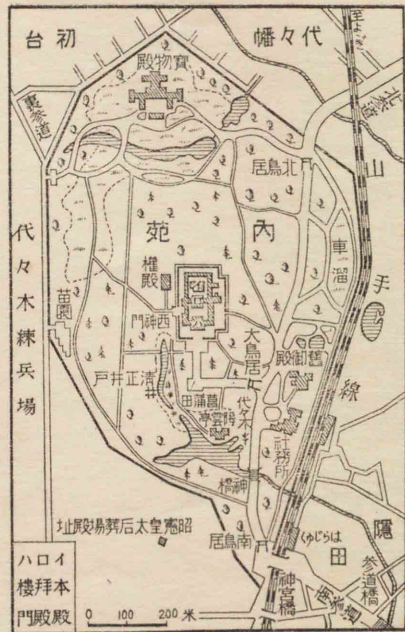




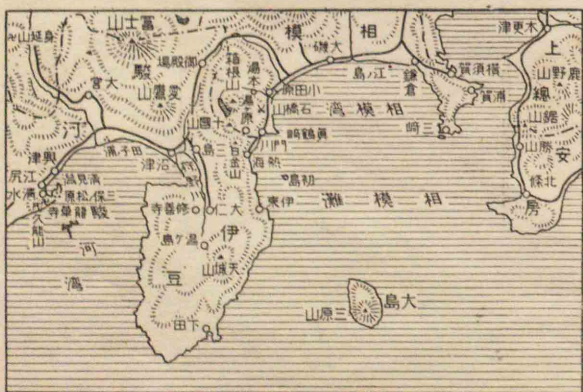
照參(生先樹藤)課五十第



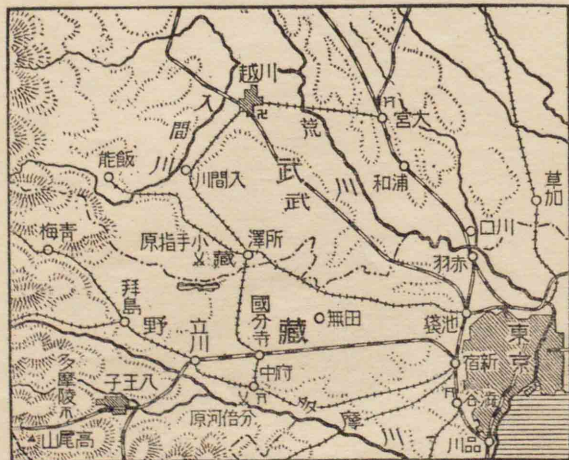
照參(日落の灘模相)課五第



照參(宮神治明)課一第



照參(記の軸が我)課八十第



照參(徑の野蔵武)課六第











文部省檢定濟

昭和六年十一月十八日 中學國語教科書  
 昭和八年七月六日 實業學校國語教科書

83

大正十四年十月十日 發行  
 大正十五年一月三日 訂正三版印刷  
 昭和三年七月二十日 訂正四版印刷  
 昭和六年七月廿八日 訂正五版印刷  
 大正十四年十月十三日 發行  
 大正十五年一月五日 訂正再版發行  
 昭和三年七月廿三日 訂正三版發行  
 昭和六年七月廿一日 訂正四版發行  
 昭和六年七月廿一日 訂正五版發行  
 昭和六年十一月十七日 訂正六版印刷  
 昭和六年十一月二十日 訂正六版發行



發  
兌

振替口座東京二六四四番  
 振替口座大阪四七一番

編者  
 印發者  
 發行所

訂正	新	日	本	讀	本
卷一—六	各	金	六	十	錢
卷七—十	各	金	五	十	五
價	定	各	金	五	十

編者 吉澤義則  
 東京市左京區修學院西沮澤町四  
 東京市神田區神保町一丁目二五ノ一  
 鈴木政雄  
 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地  
 鈴木常松  
 東京市神田區神保町一丁目二五ノ一  
 修文館  
 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地



